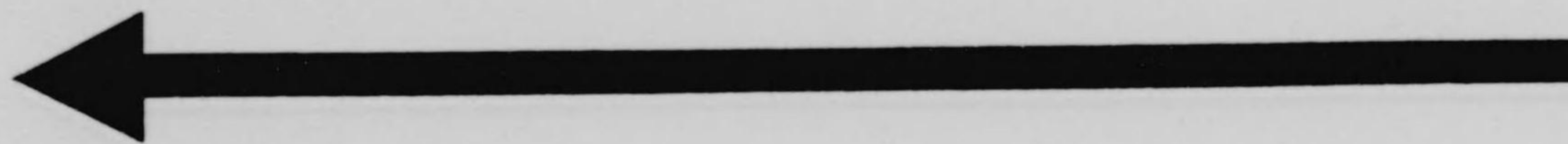


363
203



始



363-203



新纂
雄辯術

尾崎行雄校訂

東京 二松堂發行

大正
6. 7. 2
内交

赤珠是確
辯

美山古



赤珠是確
美山古



辯
文
武
是
序

序

劍、文、辯の三者は何れも皆な一世を壓服するの具なり。故に古來より民衆を威壓し、指導し偉名を千古に輝かし、而かも尙ほ赫奕たる光輝を以て全球の民人に迫る英雄雋傑は何れも皆な其の一に卓越せる雄なり。而して劍、文は幾分個人の天賦の然らしむる所あるも、辯に至つては必ずしも然らず。百練不撓の功の必然的に現はるゝの事實は彼のデモステネス最も好く之を證す。即ち雄辯は何人も學びて之に達し得るの技なり。然るに世の人動もすれば雄辯を以て個人の天賦なるか

の如くに淺解し、敢て之が修養に努めんとするもの勝
なはき眞に憫むべし。

方今時勢の進運に従ひ雄辯は益其の價値を認められつゝ
あり。政治界は勿論、或は學術界、或は實業界、更
に交際社界に於ても辯説に雄なるものは何れも其の社
會の注目に價するに至れり。斯く辯説の價値の益認識
せられつゝあるにも拘らず辯説の技を説き、修養の道
程にあるものをして誤りなき方向へ導くものなきは眞
に恨事たり。偶之を説くものあるも其の内容粗雑にし
て徒らに俗悪なる實例のみを以て充すに止り、其の基
礎的知識を説くものある莫し。故に最新の科學的教育

を受けたるもの、殆んど見るに堪えざるもののみに屬
す。於是乎、本書は如上の缺陷を補はんが爲め雄辯の
眞義を闡明し、雄辯の修養に志すものに其の基礎的知
識を賦與し、尙更に幾多の實例を擧げて實際的説明に
盡せるものなり。即ち雄辯は其の基礎的知識を缺くに
於ては幾多の實例に通ずるも遂に何等の得る所なきを
信ずればなり。斯くの如き意味に於て本書は雄辯に志
を懷くものに多少なりとも益する所あれば編者の幸福
なり。

特に政界に於ける唯一の雄辯家たる尾崎行雄先生が本
書を熱心に校閲せられたるは編者の大いなる歡びとす

る所にして且つ讀者も亦た先生の直接指導を受くるに
等しく利益する所極めて大なるものと信ず。

大正六年初夏

編者誌す

最新雄辯術目次

緒論	一頁
第一章 演説とは如何なるものか	六
人生の一部	六
演説は學び得るか	二
何を學ぶべきか	一五
第二章 演説體の研究	三
會話的演説	三
これが果して演説であるか	三

演説と會話との比較……………二六

一般的誤解の訂正……………三一

實感、熱誠……………四一

草稿演説と記憶演説……………五〇

即席演説……………五五

聴象との親和……………六〇

演説家の注意……………六六

第三章 音聲の整調……………七

音聲の音樂的整調……………六

音樂的整調の秘訣……………八一

整調の實驗……………八九

第四章 ゼスチユア……………七

ゼスチユアの定義……………七

表現の重要手段たる理由……………一〇

演説を華かならしむる爲めのゼスチユア……………一〇

ゼスチユア練習法 第一段階……………一九

ゼスチユア練習法 第二段階……………二四

ゼスチユア練習法 第三段階……………二七

ゼスチユアの種類……………二八

第五章 演説上の興味……………一六

演説家の目的……………一六

興味……………二九

興味を求むる法……………一九七

ユーモア……………二〇六

例話の興味……………二一一

種々の興味……………二二七

第六章 演壇上の注意……………二四〇

姿勢……………二四〇

最初の挨拶……………二四二

演説の途中……………二四八

演説後の挨拶……………二五五

第七章 聴衆感化法……………二六二

偉大なる雄辯家の信條……………二五七

善き人格、善き演説……………二六一

熱誠及其の表現……………二六六

虚偽感情の効果……………二七二

俳優の感情表現法……………二七七

俳優は果して感ずるか……………二八一

偉大なる雄辯家の證明……………二八四

偉大なる告白……………二九〇

反對論に對する吾々の説明……………二九五

第八章 聴衆指導法……………二九七

信服せしめよ……………三〇七

信服の心理……………二九

想像と心服……………三〇

暗示……………三〇八

群衆の心理……………三二五

聴衆と群衆……………三三〇

聴衆を群衆に變せしむる法……………三三四

聴衆を指導する法……………三三九

目次終

新最雄辯術

尾崎行雄校訂
青年雄辯會編



吾々人間が社會的動物であるとは、既に進化論者、生物學者、心理學者の説く所であつて而かも這は些かの疑ひをも容れざる所である。即ち吾々は、最初に家族を創造し、部落を形成し、やがて社會及國家を組織し、以て自らの本性なる社會的本能を實現し、更に宗教藝術を創造し、以て各自の思想及感情の交響を營むものである。以上、吾々は孤獨にて社會的動物であることが吾々人間の特性である以上、吾々は孤獨にて

生活することは出来ない。且つ孤獨生活を營むことに依て人間の理想を實現することは所詮不可能である。即ち彼等は隣人と交り、隣村と結び、隣國と相通じ而して自らの社交的本能を遺憾なく實現し、且つ其間に自己の健全なる理想を實現して行く。故に人間を簡單に定義するならば彼等は、巧妙に社交し、健全に自己の理想を實現しつゝある一個の動物に他ならない。

而して吾々は、如何なる形式の下に自らの社交的本能を實現しつゝあるか、最も簡單に言ふならば、吾々人間は、果して如何なる手段を以て他と交りつゝあるか、吾々の社交的本能が充分なる満足をも以て實現せらるゝ爲めに、吾々に果して如何なるものが天賦せられてゐるであらうか。と云ふに其は言ふまでなく、言語である。即ち吾々は日常他と交り、他と遊ぶに當つても言語なくしてするにとは出来ない。勿論太古の原始的

人類の間には今日の如き精化せられたる言語はなかつたにしても、言語そのものが極めて原始的な、精化せられざる情緒の下に存在してゐたといふ事實は、斷じて否定し能はざる所である。而して言語の發達及變遷の研究は、是を言語學に悉するを以て茲には全く省略することとする。言語は實に吾々人間の社交的本能を實現する爲めに缺くべからざる必須のものである。即ち吾々は、言語に依て自らの思想及感情を發表し、他の思想及感情との交融を計り、やがて其の本性たる社交性を發揮することとなるのである。而已ならず吾々人間は、言語に依て他の思想及感情をば容易に知ることが出来、やがて自らの思想及感情を豊かならしむる。斯くして言語を以て吾々は不斷に他に交り、他と結び、他を知り以て自らの社交的本能を満足せしめて、其處に絶大の歡びを感ずると共に、更に言語に依て現はさるゝ他の思想及感情をば自らの思想及感情と

交響せしめ以て、或は意識的に、或は無意識的に自らの向上と進歩とを實現しつゝあるのである。

是を廣い意味で言ふならば、吾々人間は、言語を以て常に他と交り、他を知り而して各自の社交的本能を充足し、且つ各自の思想及感情の向上と進歩とを實現すると共に、更に進んで社會及一般人類の向上を成就しつゝあるのである。何となれば社會は言ふまでもなく個人を單位として組織せられたものであるから個人個人の向上と進歩とは、やがて一般社會の向上と進歩とを意味するからである。即ち近代の精化せられたる文明は、實に各個人の思想及感情の向上と進歩とに依て得られるもの以外ならぬ。

而して吾々の思想及感情が言語に依て發表せらるゝ場合は、多く談話なる形式に依てせらるゝ。故に、談話は吾々人間の思想及感情を發表せ

んが爲めに組織せられたる連續的言語であると見ねばならぬ。吾々は常に談話に依て、對者に自己の思想及感情を發表するが、然し談話は必ずしもさうではないが、多くの場合、一人若しくは少數の對者に向つて自己の思想及感情を發表するの意味に適用せられゝることは今更茲に言ふまでもあるまい。

更に、或る特別なる形式に言語が適用せらるゝのが即ち演説である。演説は言ふまでもなく或る特別なる意味を有する談話であると言ひ得るが、然し決して談話そのものではない。故に談話そのものゝ研究が、演説の研究に、或る何等かの暗示に與ふことはあるにしても、直接には多くの場合大して利益を齎らすことゝはならない。即ち演説は、それ自身特殊なるものであるから従つてそれが觀察點も、研究の基礎も、すべて談話と離れて殆んど全く獨立せるものと見ねばならぬ。然らば演説

とは果して如何なるものであるか。

第一章 演説とは如何なるものか

人生の一部

演説とは果して如何なるものであるかに關しては、世論必ずしも一致してゐない。或るものは演説を以て文明人の有する最高技術であると云へ、或るものはそれは單に口舌上の技巧であるに過ぎないと言つて必ずしも重んじてゐない。然るに吾々から見れば演説に對する是等の批評は必ずしも意とするの必要を認めない。即ち吾々は演説を目して、それは善いものでもあり、悪いものでもあり、且つ卑いものでもあり、尊いものでもありと言ひ得る。演説に對する是等の善惡尊卑の批評は、演説家及演説法研究者にとつては何等の價值も、何等の權威をも有することなし

くして、全く無意味なるものである。元來人生には必ずしも善いもの、尊いものばかりが存在するものではなく、又た卑いもの悪いものばかりが存在するものではない。或る場合には是等善惡尊卑の批評を超越し、其等とは全く獨立して、而かも偉大なる權威を以て存在するものもある。演説は即ちそれである。演説はそれ自身既に人生の一部である、且つ何人も常になすところのものである。故に演説は善惡尊卑の批評を超越して、それ自身既に人生の一部であるといふ理由から最も重要なものとして存在の意義を有するものと観るのが、最も穩健にして且つ最も公平なる觀察であると言はねばならぬ。

演説は比較的、現代よりも寧ろ古代に於て重要であつたといふものがある。即ち希臘羅馬の榮へた時代に於ては、偉大なる天才雄辯家が現はれて、時代の人民を指導した。其時代に於ては演説は實に重要なもの

のであつて、演説に長じてゐるさいすれば、縦令何人であらうとも、征服せずには置かなかつた。武人が剣を以て人民を指導したといふよりは、事雄辯家が演説を以て一世を指導し、風靡したのが即ち古代の情態である。其の時代の人民の多くは蒙昧にして、理義の觀念に乏しいのを幸ひに、偉常なる雄辯家が、熾然たる雄辯を振つて人民の頭に繞れる理義の觀念を明かにしたのであるから、當時の人民は忽ちにして其の雄辯家の華かなる言説に眩惑して全く征服せられた、其故演説は、古代に於ては全く重要な地歩を占めてゐたといふのである。然るに現代の如く人々皆な理義の觀念に明るく、事柄の是非善惡をば容易に辨別し得るやうになつたからには、全く不必要とは言はれないが、然し古代に於けるが如くに爾かく必要ではないと言ふのである。吾々は古代に於て演説は重要な地歩を占めてゐたといふ議論は容易に承認することが出来るが、然

し現代に於ては爾かく必要でないといふ議論には容易に承認することが出来ない。寧ろ現代に於ても古代と同様に演説が重要な地位を占めてゐるといふ議論を以て最も妥當なりと信するものである。即ち現代は論議の時代と言はれる程までに論議が盛んになつて、如何なる事柄もすべて論議に依つて決定せられ、政治ですらも一般の論議即ち輿論に依つて決定せらるゝ有様であるから、従つて演説も亦たそれが重要な度を増しつゝあるものと見ねばならぬ。故に、若し茲に演説が益々重要なりつゝあるといふ事實に關して述べた諸大家の意見を蒐めるならば、吾々は優に本書の全部を埋めることが出来る。有名なる英國のカーゾン卿は、數年前劍橋大學生に向つて以下の如きことを言つたことがある。

「雄辯即ち言説に依つて人を動かす力が、今日の如く權威ある、今日の如く効果ある時代は嘗てなく、今日の如く一層有益なることなく、且つ

一の藝能として今日の如くより高く尊敬されたる時代は嘗てなかつた」米國の上院の首領として有名であつた故ホーア氏は、晩年に於て以下の如きことを絶叫した。

「永く生きておればある程、私は雄辯の價値を認むるやうになつて来た。……何れの米國の青年も、若し或る尊敬すべき方法を以て米國民を最も完全に感化せんに欲する目的を有するならば、須らく最も善き演説家たらんことを望まねばならぬ」

以上二大家の言説を顧みて、吾々は、演説とは果して如何なる性質のものであるかを知ることが出来たが、然し雄辯とか、能辯とかいふ言葉は動もすれば悪い意味を帯びて響く場合がないでもない。即ち演説の技能は、感かなる若しくは悪しき意味を有する目的に供され易いからである。對話に於けると同様に、演壇上に立ちてする無意味なる饒舌や、無

駄口を喋舌することも勿論、雄辯には相違ないが、然し嚴肅なる意味に雄辯を定義するならば、決して斯かるものではない。故に斯かる混亂を除かんが爲めに、茲では雄辯なる言葉をば嚴密に定義するの必要を感ずる。而してそれが最も適確なる定義は、彼のカーゾン卿が「雄辯とは言葉の力の最も高き證明である」といふ定義をばそのまゝ何等の訂正を加ふることなくして適用することとする。

演説は學び得るか

演説は果して學び得るものなりやとの疑問は常に一種を不安を抱かせ或るものは常人の學びて得る能はざる天賦の才能であつて、其の本質に於て既に吾々の研究の範圍を超越するものであると思惟して、學ばざるに既に悲觀的態度を抱くものすらある。或るものにとつては演説は、自然の賜物たる驚くべき力を要する驚くべき藝能である。且つ自由なる天

賦の才能が偉大なる雄辯家に必要なることは些かの疑をも容れざる真理であるが、然し不斷の頑烈なる努力に依て偉常なる雄辯家となつた人も決して稀れではない。

又た或るものは説を爲して「何れの點に於ても人類に關する問題は單純なるが如く、演説も亦た研究すべく餘りに單純である」と、或るものは更に「演説は、理論の問題ではなくて單に實際の問題に過ぎないではないか」と言ふが、然し吾々は單純は複雑の精であり、實際と經驗とは絶對の本質であることを忘れてはならない。即ち實際的經驗なくしては何なる學術と雖も決して價值あるとは言はれない。故に演説が單に實際の問題であるに過ぎないといふ議論は、少しも演説を批難することゝはならない。又た何等の實際的經驗なくして善き演説家、大雄辯家になつた人もないではないが、しかし斯くの如き事實は、必ずしも演説が實際

的問題であると事實を打ち消すことはならないのである。法律學、物理學、機械學、農學等すべて學問は其の論理が、あらゆる人々の得たる經驗より確實なる基礎を得て、始めて完全の域に達するものであり、これなくしては決して完全なる學術とは言はれない。故に實際的であり、單純であるといふ意味からして演説が研究の價值なきものと看做すは決して妥當の觀察ではない。

前述の如く何れの學問も實際的經驗に依て其の理論を確實にし、然る後ち始めて眞實なる科學として存在の權威を有するに至るのであるから、實際的經驗の科學に於ける價值は、眞に侮るべからざるものと観ねばならぬ。演説に於ても實際的、經驗的なるが故に、理論的、學術的に研究する價值なきが如くに斷ずるは誤れるの甚だしきものであつて、却て實際的、經驗的なるが故に、研究の價值あるものと観ねばならぬ。

更に實際的經驗の助力を得ることなくして成功せる演説家即ち世人が目して以て天才雄辯家と稱する人々の多くは、遠き以前或る機會に於て殆んど無意識的になせる實際的經驗の價値を證明することとなり、又た自らなせる過去の實際的經驗を否定し、恰も何等の努力もなくして大雄辯家になれるが如くに吹聴する人々もあるが、然し斯くの如きは全く自らをして天才雄辯家たるが如くに誤示せんとする極めて淺膚なる虛榮心に囚はれるに他ならない。固より如何なる方面に於てか、吾々人間は幾許の才能を有するが如くに、演説に於ても或る人は幾分の賦才を有することがあるも、而かも單に幾分の賦才を有するのみで、實際的經驗を有しないとすれば決して偉大なる雄辯家となることは出来ない。要するに演説は既に幾分の賦才を有し、而して努力を惜むことなくして不斷の實際的經驗を集積するに於ては必ず到達し得る人間の藝能であ

つて、且つ何等の賦才も有することなくとも、實際的經驗に費す努力を省むことないとすれば、何人も適度の段階に到達し得、更に其の實際的經驗は、是れを科學的に研究し得るものと見て少しも差支はない。

何を學ぶべきか

演説は前述の如く實際を主とする他の技術と等しく學んで得ることの出来るものとすれば、演説を學ばんとするものは果して何を學ぶべきであらうか。以下のページは此の疑問に與ふべき最善の返答と見るべきものである。簡単に言ふならば、演説を研究するものは、先づ論題の撰擇に就て多く學び、演説の材料を發見することに就て、又た自己の演説の準備に關して學ばねばならぬ。更に言ふならば自己の意見を研究し、自己の精神情態に關して、自分と聽衆との關係に就いて、演説を愉快ならしむる爲めに如何に材料を取扱ふべきかに就いて、聽衆を説服し、得心

せしむることに就いて學ばねばならぬ。其の上自ら學びたることは自ら
 實際的に適用するやうに努めねばならぬ。以上の事柄は、或る意味に於
 ては多少優れた人であるならば、既に理解し、必ずしも茲に新しく説く
 までもないことではあるが、然し如何なる人であつても演説を學ばんと
 するならば、自ら既に知悉しある事柄も、これを實際に適用する以前に
 於て、必ずや長日月の練習を要するものなることを忘れてはならぬ。殊
 に、演壇に立つ際に起る自己の種々なる心的行爲をば適當に訓練し、聽
 衆の前に立ちて少しも恐れぬ習慣を向上せねばならぬ。優れたる演説
 家は自己の目的が那邊にあるかを演壇に立つて演説を續けてゐながら
 忘れずに意識してゐることが出来るが、然し乍ら多くの人々は、正しき
 方法で聽衆に對し自己の演説の目的を眞實に話し得るに至るまでは、多
 年の經驗を要するものであつて、決して一朝一夕の業ではない。即ち多

くの人々は演壇に立ちて演説を續けてゐる際中になると、何時しか自己
 の演説の最初の目的と離れて了ひ、最初の目的とは餘りに關係の少き事
 柄に就いて演説してゐるものである。這は言ふまでもなく一部分は自制
 の問題であり、一部分は聽衆の前に立ちて、少しも恐怖しないといふ精
 神を徐々に實現すべき問題に他ならない。即ち自ら制する所あり、自ら
 恐れざる所ありとすれば、斯くの如き醜さは決してないものと見ねばな
 らない。

本書は固より雄辯の捷徑を拓かんが爲めに企てたものではない。又言
 ふべき何等の價値なきことを喋々と演説したからとて決して雄辯家と言
 ふことは出来ない。即ち何等か價値あることを言はずして大雄辯を振ふ
 方法は決してないのである。故に、若し此の眞理を少しも顧みることな
 くして全く無視するが如き企ては、演説をして全く信するに足らざるも

のと看做すこととなる。然し乍ら茲に注意しなければならぬのは、縦令無意味なる饒舌の如くに見えるやうな演説の中にも尙見逃し難い一面の眞理が含まれ、而已ならず言はねばならぬことは、縦令表面無意味なる饒舌の如くに見えても、多くの場合其の全體の意味からして絶対に必要とは言はれないといふことである。語るべき或る何物かを與へられ、それを語ることを欲し、且つ其處に適當なる機會が與へられ、斯くしてなされる演説は必ずや成功に終るものであるが、然し全然不要と思はれることに就ては、全然舌を動かしてはならない。或る演説家の中にはこれを誤つて、自己の語らうとする目的とは全然無關係のことと就いて非常に力を置いて語り、而して最後に最も憐れむべき結果に陥るものすら往々見られないではない。斯くの如きは全く演説の原理をばかしくも理解することなくして演説する人であつて、最も憐れむべきものである。

と言はねばならぬ。語るべき何物かを有するといふことは其の演説に必要缺くべからざるものを有するといふ意味であつて、決して不必要なるものを有するといふ意味ではない。

語るべき何物かを有するといふこと、即ち話さねばならぬものを有するといふことの他に、演説家は考へる能力を有さねばならぬ。更に考へる能力を有するばかりでなく、自ら考へたものを他に語るべき能力を持つてゐなければならぬ。更にそれをば語るばかりでなく、それをば他に聴かせるべき能力を持つてゐなければならぬばかりでなく、それをば完全に理解せしめ、且つ其の力を感せしむる能力をも有さねばならぬ。

以上の種々なる能力を得ることに最善の努力を拂ふことなくしては所詮善き演説家になることは出来ない。以上述べたることはばかりでなく尙一層演説家に資する種々なる條件を列挙するならば先づ以下の如きもので

ある。——演題——演説の内容、其の構成及分解等で、是等は固より全體とは看做されないが、然し演説家自身に於て當然研究せねばならぬ重要な問題である。

以上述べたるものと同様に明かに、而かも演説研究に必要な他の理論を暗示するに、演説家は、人も知る如く、多数の人々の指導者であるから、演説家になるといふことはやがて群衆の指導者になるといふことである。即ち群衆の指導者は常に群衆を適度に感化し、而して自らの理想に従ひて群衆を指導して行くが如く、演説家も亦た聴衆の指導者となり、而して彼等を感じせねばならぬもの故、演説の原則は、やがて感化の原則であるといふことを忘れてはならぬ。聴衆に語り、聴衆を喜ばしめ、聴衆を信服せしめ聴衆を感化せしめること、そのことが即ち演説家の根本目的である。而して指導者は自制の人であり、且つ群衆の面前に

立ちても少しも恐れ戦くことなく、自己の感情、精神をば適度に制し得る人であらねばならぬといふことは、既に自然の理であるから何等説明を要しないのであるが、これに就いて彼の有名なる文豪エマーソンは、「若し私が演説家たるの資格を簡単に言ふならば、先づ第一に男らしき態度である。而して茲に言ふ所の男らしき態度とは、即ち、沈毅 (Presence of Mind) を意味することと言つてゐるが、眞に味ふべき言葉であるではないか。演説家は雑多なる聴衆の面前に立ちて、而かも彼等の辛辣なる批評的眼光を一齋に投射せられても、少しも恐れず、憶せず、沈毅にして而かも泰然自若たる態度を保持して自らの思ふ所、感ず所をば自由に、横に述べ得る程までに修養する所なくてはならない。著者は此の最も重要な修養に關し最新科學の齎らせる知識を基礎とし章を追ふて徐々に而かも確實に述べると共に、他の演説家に缺くべからざる重要法則に就

いても、同じく最新科学を基礎とし、尙種々なる経験より是れに批評を加へて以て演説そのものをば、根本的に解決するであらう。

第二章 演説體の研究

會話的演説

演説のあらゆる記憶が抹殺せられ、爲めに此の世の中には演説をしたものもなければ演説を聞いたものもないと想像せよ。又たあらゆる演説に關する記録が消滅し、それが爲めに演説の研究に要する材料が全然なくなつたと想像せよ。斯かる際に於て、大競技か、大戦争か、大火災を見物して來たばかりの一人の男が、往來に於て偶然一人の友人に會し、見物して來たまゝを友人に話してゐる間に、折柄通行中の他の一人が立ち止りて其話を聞き、又た他の一人が立ち止りやがて何時の間にか其の

男の周圍には二十人、五十人、百人と集合し來り彼の話を聞いてゐる間に群衆は益々興味を感じて來たが、然し後方にゐる群衆が彼の面白い物語をば充分に聞かれぬ爲に、又語つてゐる彼の顔が少しも見えないのに業を煮やし、又た彼の活聲が微かに聞くことが出來、彼の顔も少しは見えないが、はつきりとは見えないといふやうな位置にゐる群衆が、彼の話を一層はつきりと聞きたくなり、彼の顔を一層はつきりと見たいので、「荷馬車の上の上れ、荷馬車の上の上れ」と大聲を上げて叫ぶので、彼も已むなく荷馬車の上の上つて更に大聲を發して物語を進行させる。

これが果して演説であるか

此の情景を観察するに、最初は全く一人の男と、其の友人との會話が演説になつたのであるが、然し想像されたる情態(即ち演説といふものが全然ないといふ情態)の下に於ては、これは單に擴大されたる會話に過ぎ

ないと思ひ得、且つこれを平面的に解すれば少しも不自然的な、若しくは非演説的なものではなくて、全く自然的な、立派な演説の如くに思はれるが、然し此の際に於ける話者は果して如何なる瞬間に演説家になつたであろうか。話者の周囲に十人集つた時か、五十人の時か、若しくは話者が荷馬車の上に昇つた時であろうか。更に話者の精神若しくは動作の本質に於て何等かの眞實なる變化が起つたであろうか。畢竟するにこれを本質的に觀るならば聽者の數を増したる單なる會話であるに過ぎない。つまり本來一人を相手としてする筈であつた會話が、何時の間にか五十人、百人を相手とした會話になつたに過ぎない。故に、其の本質は依然會話であるに言ふことが出来る。又た若し彼が、一人の友人を對手とした會話が何時の間にか、多數の聽衆を相手とした演説に變化したといふことを彼自身明瞭に意識したとすれば、其處に過程の變化はあつた

かも知れないが、然し物語若しくは議論の興味が絶えず對手の情緒を支配してゐたといふことを知るならば、其處には本質的に何等の變化もなかつたことを容易に理解し得るであろう。彼が多くの人々にはつきりど見え、且つ聞えるやうな荷馬車の上に昇り爲めに、一層多く聽衆の數は増し、且つそれが爲めに彼の感情は一層強烈なものとなり、やがて彼は自分の音調と言葉づかひを修飾し、精神は緊張するやうになり、觀念や感情は通常の會話に於けるよりも一層廣く整理せられたであらうとは思はれるが、然し乍ら其等は單に程度の變化であつて、決して本質の變化ではない。彼は、依然として聽衆と會話しつゝあつたのである。右は演説を以て會話の發達したるものなるが如く解する人に向つて其の誤謬を訂正せんが爲めに實際的に示したる企てに過ぎない。演説は決して奇蹟的、技巧的方法を要せざるものであるのみならず、吾々の最も

親しめる會話の發達若しくは擴大せられたるものでもないと言ふことを知つてゐなければならぬ。此の觀念を有するに至つて始めて、吾々は無意味なる努力から完全に解放せらるゝであらう。

演説と會話の比較

演説家は徹頭徹尾自分一人で話してゐるが、會話は、或は話したり或は聞いたりする、此の點が演説と會話との著しき相違であるといふ人があるが、然し乍ら斯くの如き説明解釋は全く誤れるものと看ねばならぬ。何となれば會話は必ずしも双方が喋舌るものではなくて、或る場合に於ては演説と同様他の一人がすべてを喋舌り他の一人は少しも喋舌ることなく、聞いてゐるやうなことがないではない。例せば青年の尊敬に値する人格高き老人が、青年に向つて何等かの訓戒を與ふるやうな場合には、多く青年は黙して何事も語らず老人の語る所を熱心に聞くだけである。

此の場合に於て吾々は老人が青年を相手にして演説をしてゐると思はない。前に掲げたる荷馬車の上の會話の如きも、彼の話聞いてゐる聴衆からは何等の質問も返答もない。老人と青年との場合、荷馬車の上の場合を考へて見ても、一人が始終話を續けてゐて他は黙して聞いてゐるに過ぎない所の會話であつて決して演説ではない、斯くの如く演説家は一人で喋舌り、會話は相互に喋舌るさといふことを以て、演説と會話との差異を決定する條件とはならない。又た演説家が始めより終りまで一人で喋舌るといふことも決して眞實ではない。聴衆は演説家を喝采し、「贊成々々」と言つたり、或は反對に、怒號し冷罵し「ノー、ノー」の聲を上げたり、更に或る場合には演説家に質問を發したり、「ヤレ、ヤレ」など叫んで演説家に元氣をつけたりなどするが是等の拍手喝采若しくは怒號冷罵等はすべて如何なる場合の演説に於ても必ず起る所の聴衆の合圖

である。即ち如何なる場合の演説に於ても、聴衆は演説家の提出せる疑問に對して何等かの返答をなさんと考へたり、或は反對に演説家に質問を提出して見たり、賛成したり、反對に妨害したりなどするものである。之に反して會話に於ては、聴者は話者の物語に對しては明かに賛成若しくは反對などをするものではなくて、聴者は單に気分や思想の微かなる表現が見らるゝに過ぎない。故に話者が單に聴者の態度若しくは表情に依て、僅かに自分の物語に興味を感じてゐるか、若しくは退屈してゐるか、賛成してゐるか、反對してゐるか、理解してゐるか、混迷してゐるかを知らるに過ぎない。斯くして話者は自ら觀察する所に應じて物語を擴大したり若しくは局限したりなどする。

更に演説と會話との第三の相違とも看做すべきは、演説は豫め用意してかゝるといふこと、會話は全然不用意でかゝるといふことであるが、

成る程演説家が或る機會があつた場合には用意してかゝるといふことは眞實であるかも知れないが、然しそれは用意してかゝることの出来る機會に於ける演説には眞實であるかも知れないが、全體の眞實であるとは思はれない。即ち或は突然なる機會に於ける演説であるとか、演説家それ自身が非常に多忙な境遇になるとか、或は演説家が懶惰である爲めに縱令用意する程の機會があつても少しも用意しないといふ場合もない。斯くの如く演説は豫め用意してかゝるものであるといふことは一般の眞實であるとは言はれない。又た會話に於ても話者が會話をする際に、全然不用意でかゝるとは言はれない。即ち或る場合には豫め充分なる用意をなして會話することもあることは既に吾々の知る所である。斯くの如く觀察して來ると、演説は豫め用意するものであり、會話は少しも用意しないでかゝるものであると言つて演説と會話とを區別しよう

とするのは全く妥當を缺いた觀察と言はねばならない。

以上述べたる所の外に演説と會話との相違は多くあるが、其等は省略しても吾々は尙ほ演説と會話とを明かに分類することには少しも困難は感じない。而かも最も通俗的に言ふならば演説家は多くの場合、より高き聲を擧げ、より連続的に語り、より多く準備をし、且つ其の特徴として多くの場合趣味若しくは遊戯的分子なき嚴肅なる問題を取扱ふのを一般としてゐる。即ち是等の相違が、最も重大なる部分をなしてゐると見て差支ない。而してこれあるが爲めに演説と會話との相違をなしてゐるが如くに見えるが、然し實際的には、會話の際に於て眞實ならざるものが演説に於て眞實なる筈はなく、演説に於て眞實ならざるものが會話に於て眞實なる筈はないのであるから、吾々は本質的には辛うじて其の相違をば認め得るのである。而して斯くの如き相違如何は、必ずしも演

説それ自身の問題には重要な意義を有するものではなく、殊に吾々が今より研究しようとする所の種々なる實際問題には多くの利益を齎らすことゝはならない故に、詳細に至る研究を略することゝする。

一般的誤解の訂正

演説に關する吾々の説明が一層進み行く前に於て吾々は、愚起る所の或る誤解に就て少しく語らなければならぬ。先づ第一に演説は、其の本質に於て、會話の如き響を要せざる、確かに普通の會話の如くにあらざる會話であり、而して此の相違がやがて非常なる相違を導くことゝなるが、是等の相違と共に、聽衆、場所、問題及話者等に依ても亦た著しき相違を齎らすことゝなる。

同一の人であつても政治、文學、宗教等を論ずる際には、様々な異なる態度を取るものであつて、各其の論題の異なるに従つて態度も各變化

するものである。又た演説家が他人の噂などをする際には、殊に目立つて昂奮若しくは感激などするものではなくて、極めて冷静な態度をとるものであるが、然し自分自身の事を語る際には、何れかと言へば感激し昂奮するものであり、最も普通に、感激的な問題に就いて語る際には、演説家自身の言葉遣も従つて感激的であるものであるといふことは否定し能はざる眞實である。

第二には、演説家が自分の演説を會話的にしようとする際に自分の演説が、會話的であるが爲めに、他の場合に於けるよりも何となく輕卒で威嚴なく力なく、且つ華かな雄辯ではないといふことを自ら想像してはならない。斯くの如きは全く杞憂に屬することであつて、事實は必ずしも斯くの如きものではない。演説が會話的であるが爲めに、却て演説家と聴衆との間に言ふべからざる親和の情が湧いて來て、難解の問題も容

易に聴衆に依て理解せらるゝこととなり、従つて演説の効果の著大なるを見ることがある。其故、米國の名士ウィリアム・クワース氏が彼の有名な奴隸解放論者キンデル・ヒフリップス氏の演説を評して「彼の演説は單なる談話であつた、而かも一人の紳士のみが話をしてゐる談話であつた」と言つたが、氏の此の評言には演説家の忘る能はざる眞理の含蓄せられぬを知る事が出来る。ヒフリップス氏の演説が全く會話的であつたとは云へ、決して力に缺けたものでなかつたといふことは、氏の此の會話的演説の後に一大擾亂の起つた事實より見て容易に判断することが出来る。更にヘツチンソン氏がヒフリップスを評して左の如く言つてゐる。

「フヒリップス氏の演説の秘訣は、眞に會話的——而かも會話的に其の力を最高度に達せしめたるものである。氏の如く演説をば會話的に試み

た人はないではないが、然し最小の努力即ち最も安易に、普通の聴衆を單位として試みた人は未だ嘗てない。氏は恰も、自分の鼻先にある或る親しい友人に對する態度を以て聴衆に對し、そして演説を試みたが、氏の談話的の演説は少しも緊張を缺くことなく、却て威嚴を失はずして親和を保つことが出来た。やがて演説が進行すると、音聲は益々深刻になり、動作は益々生き生きとして来る。言句は恰も大きな太鼓のやうに朗らかに響き渡つた。斯くしても尙ほ氏の態度は安易であり、温雅であつたが、然し虎の足のやさしく延びるが如く言ふべからざる威力があつた。

尙ほ嚴肅にして威儀あり、且つ適當なる注意を要する演説に於ても會話的本性を要することを理解せねばならない。茲で吾々が最も必要とする所は、果して如何なる態度をとることが演説家にとつて最も善いかと

いふことであるが、それは思想に相應しい表情をせねばならぬといふことを意味することとなる。即ち平易な思想を述ぶる際には普通の表情をなし、熱烈な思想を述ぶる際には、其の表情も熱烈を表現するものであらねばならぬ。そして如何なる場合に於てもそれが最も真正に、最も巧みになすことを忘れてはならない。決して演説を以て芝居、オペラ等の如き興行物とは思はず、従つて演説家自身は自らを役者等の如きものとは看做さず、人間に深き交渉を有する最も眞面目なる事業と看做して常に眞正なる態度を持してゐなければならぬ。

第三には、會話體なるものを理解しなければならぬ。とは言へば、はスタイルそのものを主張し、唱道するのではない。スタイルといふ言葉は、吾々人間は各、其の個性を發揮して存在しゐるにも拘らず、或る一つの定まれる態度に於て話をせねばならぬといふことを非常に力強く暗

示したものに過ぎない。而して茲では吾々の演説が其の要素が會話的であり、且つ演説家は各其の最善の會話をばどこまでも發展向上せしめねばならぬといふことを論ずるのであつて、決してスタイル其のものを主張し、唱道するのではない。其故、吾々が演説に求むる所は會話體ではなくて、會話性、即ち會話的内容であることを忘れてはならぬ。斯くすることゝが最も新しき、最も價値あることであり、若しくは善き演説の種々なる様式が斯くすることより現はれ、又た此の會話性を有する演説が其等の中の一であることを理解せねばならぬ。其故、如何なる時代に於ても此の會話性を有せざる大演説は未だ嘗て決して現はれなかつたのである。

尙ほ訂正せねばならぬ所の第四の誤られたる概念がある。始めて演壇に立つ全くの初歩者に向つて或る人になると、「自然らしくやれ」と忠告

ずることを屢々見る。而して此の忠告は成る程尤もらしいものであるが、然し餘り有益なものではない。更に一層深く考察するならば、吾々が善なるものを表徴する際に必ず用ふる所の文句なる此の「自然らしかれ」とは果して眞實に何を意味してゐるものであるかは少しも理解せられてはゐない。若し「自然らしきこと」が果して最も善いことだとすれば、彼の野蠻人は文明人よりも一層善い人間でなければならぬ筈であるが、然し彼等は決して人間の模範ではない。又た小兒は成人よりは自然に近いが、然し彼等を以て完全な意味に於ける人間だと思ふものは一人もあゝるまい。故に、或る哲學者は「若しも自然が吾々の理想であるならば、吾々は永遠に小兒でゐなければならぬ」と言つて、此の誤れる思想を批難した。善も悪も等しく自然であり、或る人にとつては吃ることも自然であり、又た或る人にとつては洒落れることが自然であり、更に或る

人にとつては聴集の前に立つて畏怖することも自然であり、愛せらるゝことも自然である、少くとも何等の人爲的努力なくしてものはすべて自然であると言はねばならない。此の意味からして演壇の上に立ちて自然らしくない態度をとるのも其の人にとつては自然である。徒らに「自然らしかれ」と提唱するは甚だしく誤れるものと言はねばならない。

吾々は「自然」を種々なる意味に解釋してゐる。即ち(一)自然の状態に在つて、少しも人爲的訓練のなきこと、(二)後天的影響の少しもなくして、技巧的ならざると誇大的ならざること、(三)若しくは自然の法則と一致して基礎的狀態にあること、是等が常に吾々が自然なる文字に對する理解である。而して若し吾々の五官が自然的であることが善いならば、一切の教育は悉く悪しきものと言はねばならない。吾々はあらゆる方面に於てなすが如く、演説に於ても自然を向上し、且つ缺點の是正を欲し、「自

然なること」といふ解は、常に缺點なきことの意味にも用ゐてゐる。吾々の演説の癖が聴衆に都合悪しきものであり、若しくは其の効果を減するものであるならば、吾々は其の癖をば自然的、若しくは技巧的の何れかに改善しなければならぬ。

更に「自然的」なる言葉を第二の意味に解すれば、此の「自然的なれ」といふ尤もらしい忠告は、初歩者には適用が困難であるといふこと、又た「自然らしからざる自然」が實際の自然であるといふ意味をも見出し得る。始めて演説をする人は大抵は聴衆の前に立ちて茫然として了ふものであり、尙ほ經驗ある演説家であつてすら重大なる問題を論ずる際には非常に力強く緊張することないこと、聴衆の面前に於て自分の意見を充分に述べることが出来ない。此の「自然らしく」といふ忠告を最も善い意味に取つても、單に消極的價值を有するに過ぎないものであつて、

吾々には、特殊なる音調や態度は、これを決して自覺的にしてはならぬといふことを意味するに過ぎない。吾々は、言葉は、これを用ふる何れの時に於ても確實に定義することが出来ないとするれば、全然取り去らなければならぬ。吾々は、如何にして自然的らしく演説をすべきかといふことを考へる際には、既に幾分が自然らしくなつてゐることが多い。故に「自然らしく」といふ言葉はそれ自身は吾々には殆んど無意味なるものであるかも知れないが、然し如何にして「自然らしく」すべきかといふことを考へる際に屢必要を感じるものである。吾々は現在、如何にして自然と一致して行爲すべきかを、又は演壇の上に立つても吾々が最も自然的な態度を取るやうな習慣を向上せしむべきかを要してゐるのである。故に、吾々は演説を向上進歩せしめ且つ演説に適用すべきものが果して如何なるものであるかを知るに就て、會話的らしき演説の本質即ち

ち自然に對し一層緊密に考察を遂げなければならぬ。

實感、熱誠

演説家は、果して自ら論ずるが如くに考へてゐるものか、又た自ら論じたることを實現すべきものであるか、とかいふやうな疑問は何人も起す所であるが、此の疑問に解決を與ふことは頗る興味あることである。これは必ずしも演説に於てばかりでなく、演劇に於ても同じく起る所の疑問である。即ち俳優は舞臺に於て悲劇若しくは喜劇の役に扮して演じつゝある際に果して悲劇若しくは喜劇を感じずるものであるか、或る悲劇を演じつゝある際に、彼は涙を流して如何にも悲しさに泣いてゐるか、彼は果して悲しさを感じつゝあるものか、或は其等の感情は少しも感ずることなくして、單に感ずるが如くに装ひて、観客を欺瞞してゐるのであるか、此の場合に於て演劇に於ける真理は、尙ほ演説に於ても同じく

眞理であると看做すことが出来る。故に、吾々は此の疑問をば演劇の方
 面より解決することが出来る。これに關して現代演劇評論家として有名
 なる英國のウイリアム・アトチャト氏は可成り深い研究を成し遂げてゐる。
 而して氏の研究する所に依れば、如何なる俳優であつても、自ら扮する
 所の役の感情に少しも感ずることなくしては、決して観客に偉大なる感
 動を興ふることとは出来ない。最も善く観客を感動せしむる俳優は、最も
 善い技巧に長ずる俳優ではなくして、最も善く役の感情に感動する所の
 俳優であると言つてゐる。故に氏に従へば最も善く観客を泣かしむる悲
 劇俳優は、最も善く泣く所の俳優であり、最も善く観客を泣かしむる悲
 の喜劇俳優は、最も善く自ら笑ふ所の俳優であると言ふこととなる。故
 に、何等自ら感ずることなくして観客を感動せしむる俳優は、技巧上の
 天才であり、其の天才であるが故に、自らは少しも感ずることないとし

ても、而かも感じたるが如く伴り装ひて、観客を感動せしむるのである。
 他を感動せしむるには自ら感動してゐなければならぬ、他を泣かしむ
 るには自ら泣かなければならぬ、他を笑はしむるには最初に自ら笑は
 なければならぬ。自ら感動せず、自ら泣かず、自ら笑はすして他を感
 動せしめ、他を泣かしめ、若しくは笑はしめんとするは虚偽の感情を創
 造することであつて、決してそれ自身眞實ではない。アントニオは先づ
 最初に泣いた、そして語つた。羅馬の市民は聴いた、そして泣いた。ア
 ントニオにとつては、語ることは泣くことのものであつた。
 アーチャー氏は是等の研究をば、決して單純なる心理的研究にのみに
 基礎を置くことなくして、幾多の名俳優より實際の經驗に關する告白を
 基礎として研究したものである。名俳優の告白は氏の研究に偉大なる效
 果を齎らして、遂に演劇の眞理として演劇研究家の承認せぬばならぬこ

と、なつてゐる。而して演劇の此の眞理は、同じく演説に於ても眞理として吾々も承認せねばならない。演説家も俳優と同じく自ら感動することなくして聴衆を感動せしむることは所詮出来ない、聴衆を泣かすことも、笑はしむることも演説家自らに於て、泣き、若しくは笑ふやうにならなくてはならない。然し恚う詛じ來ればとて、演説家は遂に演説家であつて、俳優ではないのであるから、俳優が舞臺に於て泣き若しくは笑ふが如く、演壇に於て泣き、若しくは笑はせねばならないのではなくて、少くとも聴衆を感動せしめ、泣かしめ、笑はしめるのにはそれと同程度に感じてゐなければならぬといふことである。

年若い演説家になると眞面目なるべき筈の演説會をば恰も博覽會か何かのやうに思つて、必ずしも熱心でないものがある。又た老年の演説家は屢、不熱心で、少しも氣乗りせず、至く平凡な態度を以て演説をなして

ゐる、殊に始終演説ばかりしてゐる演説家や、若しくは演説をば日常の事務の如くに心得てゐる演説家になると、至く何等の感動も、熱誠も見られない。尙ほ幾分か演説を會話的にしようとする演説家の演説には多くの場合、感激と熱誠に乏しいものが多い。之に反して「自ら言はんと欲する所を言ふ」といふやうな先天的の演説家や、演説に關して誤れる概念を有せざる演説家の演説は、何時しか自然的に優れたる演説に向上して行くものである。然し乍ら若しも演説家が、自分の演説を公開する即ち他人に語り若しくは見せびらかさんが爲めに演説するといふやうな概念を以て演説を始めたり、若しくは演説は至く法則を以て取扱ふ所の外的、機械的のものであるか、若しくは或る他の類型の至き模倣であるなど、いふやうな至く誤れる概念を以て演説を始めたりなどするならば、徒らに通俗なる調子を向上せしむるに止り、熱心なる聴衆の期待に背き、

且つ演説本來の使命を空うするが如き結果に陥らなければならぬ。不幸にも吾々は讀方も、話し方も其の始めより既に誤つてゐるばかりでなく、すべて熱誠を缺ける氣乗りのしないといふ悪い習慣を造つてゐる、其故、吾々は常に此の誤れる讀方、誤れる話し方より全く逃れて正しき方へと行く爲めに發音其他話し振りなどに多大の注意を拂はなければならぬ。

讀むこと、話すことの此の二つに就て考へて見ると、吾々は此の二つの何れにも熱心でない場合が往々ある。即ち吾々の心は讀むこと、話すこと、いふ行爲には少しも關係せず全く其の行爲から離れてゐる場合が往々あるを知ることが出来る。これは全く讀むこと、話すことそのことには少しも實感、若しくは熱誠を有しないで全く機械的に行爲してゐるに過ぎないからである。而して此の二つの場合を比較して見るに何れか

と言へば話す際よりも、讀む際の方が、吾々の心が一層無關係になり易いやうである。例へば宣教師が教會に於て讚美歌を歌ひ、若しくは聖書を讀む際の如きは、其の文章若しくは句の意味をば極めて漠然と理解するばかりでなく、更に彼には何等の感情をも反射して來るのではない。宣教師は例の太鼓の鳴るやうな一種の型のある宣教師式の音調で讀んだり歌つたりするかも知れない。然し讀んだり歌つたりすればとて、彼には何等の理解も、何等の感情も起つてゐるのではない。更に一方信者はどうであるかといふに、彼等になると、眞に宣教師の讀むこと、歌ふことを熱心に傾聴してゐるものは先づ殆んどないと言つても、敢て過言ではあるまい。彼等の或るものは宣教師の讀むこと、歌ふことは全く無頓着で、全く別方面の自分の仕事とか、流行とかを考へるか、又た稀れに敬虔な感に打たれるものがあるとしても、それは宣教師の説教若しくは

讚美歌から来る人間の知識とは全く無關係な一種言ふべからざる敬虔なる音調、四邊の氣分等に依て起る所の感情であつて、決して理解の齎らせる感情ではない。佛教を信すること篤き田舎の老媪が、「南無阿彌陀佛」なる言葉を聴くと、直ちに有難涙を流して歎するの吾々は屢々見ることであるが斯くの如きは決して老媪が何故に有難いかを正當に理解して歎するのではなくて、「南無阿彌陀佛」なる言葉の有する一種の特殊なる音調に打たれて歎するのである。大抵の教會は説教一天張りであつて説教以外には殆んど何ももの認めない位である。其故、斯くの如き教會に於ては説教の時間になると、教會内の氣分は著しく變化し、人々の注意を凝集せしむることとなる。又た斯くの如く説教に重きを置く教會に於ては集ひ來れる信者等は、宣教師が説教の教文即ちバイブルを讀む際に、宣教師の讀むのを聴いて意味を理解するのではなくて、聴くと同

時に自らも其の場合手にせるバイブルを讀んで始めて理解し得るのである。故に、此の場合の信者等の理解の順序を精密に觀察するならば、彼等は自らの書齋に於てひとり靜かにバイブルを讀んで理解したと同一のものでなくてはならない。これが即ち最も普通に行はるゝ平凡なる讀み方の自然的結果であるに過ぎない。宣教師がバイブルを讀んで而かも其の意味の説明に困難を感じた際には、彼は宣教師式の獨特なる音調を特更に出して其の一節を説明し、そして其の一節が如何にも重大なる句であるかのやうな態度を以て信者に説く故、信者等は爲めて驚くべき興味を以て其の一節を聴き、「これは如何にも大切な句だ」と思ふやうになるものである。

以上宣教師の讀み方に關して述べたる所は、他の演説家の讀み方にも多くの場合眞理である。例へば演説家が演壇の上に立ちて自己の演説を

ば一層正確ならしめた爲めに、或る引證文を読み始めると、聴衆は、讀むことそのことには餘り注意を拂はないで、やがて讀んだ引證文の意味を説明する際に至つて始めて熱心になるものである。

草稿演説と記憶演説

草稿を手にして演壇に立ち、演説をするといふよりは多く草稿を朗讀するなどは決して推賞すべきことではない。斯くの如きは全く演説の訓練を有せざる、若しくは辯舌の拙劣なる人のすることであつて、決して演説家たらんとする人のすべきことではない。これは全く演説に何等の經驗をも有せざる人が、已むを得ざることであつて、而かも何人も出來るといふ理由から、少しも趣味もなく、動もすれば内容の空虚なる、感化力なき言葉を無趣味的に繰り返すといふに過ぎないものである。草稿演説も、演説者自身が熱心であり、且つ其の内容が聴衆の

心と相觸るゝならば、普通の演説と同程度の効果があり、聴衆にも生々とした感銘を與ふるものであるが、然るに草稿演説をなす時には、大抵の人の心は、演説家のやうに熱烈になれぬばかりでなく、且つ聴衆も熱心を以て聴くことを欲しない故に、従つて何時しか空虚となり、單調となり多くの場合、演説に等しい効果を齎らすことゝはならないのである。之に反して記憶を辿つて演説をする演説家は、より深く聴衆の心と觸れるといふ理由から草稿演説家よりも一層の効果を得るものである。尙ほ記憶を辿つてする演説家と、何等の記憶を有することなき、即ち何等の準備をもなき演説家と比較するならば、整然たる記憶を有する演説家は、何れかと云へば、様々なる、雜然たる觀念の中から其の場合にのみ必要な觀念のみを選択して演説する際に非常なる便宜を有し、且つ其の場合に適當なる言葉を選択するにも非常なる効果を得ることゝなる。

即ち何等の準備なくしてする即席演説家は、演壇の上に立ちても雑然たる観念を整頓し、其の中より有用なる観念のみを選択し、又た適當なる言葉までも選擇する爲めに、多くの繁雜と、困難とに遭遇するものと見なくてはならない。これに比較すると整然たる記憶を辿つてする演説家は斯くの如き煩雜と困難とから全く免れることが出来る。故に若し此の理論を一層進行せしむるならば、前に述べたるが如き草稿演説家は、全く此の煩雜と困難とから解放されて、何れの演説よりも一層の效果を得べき筈であるが、然しこれは前にも述べたるが如く、極めて單調であり且つ空虚であるといふ理由から、却て反對の結果を齎らすこととなつてゐる。記憶を辿つてする演説家は以上の如き煩雜と困難とがない故に、思ふがまゝに自己の意見を述べることが出来て、即席演説及び充分なる準備をなしたる演説に對しても多大の尊敬を拂ふの價値を有するが、然

し世の最も尊敬に値する大演説は、主として記憶を主とせる演説である。更に記憶演説のみに依つて自らの演説を熟練せしめたる演説家は、草稿を手にして聴衆の前に立つやうな場合には極めて拙いことをするものである。斯くの如く記憶演説のみに偏して熟練を積むならば、他の演説に熟練を缺くやうな結果に陥る故、演説家は、自己の演説が出来得るだけ自由なる、囚はれざるものとなさんが爲めに、種々なる形式の演説に就て學ぶ所なくてはならない。練習の順序から言へば、草稿演説が先づ最初のものでなければなるない、自己の意見の概略をば紙片に記して草稿を造り、而して演壇に立ちても、少しも恐怖することなくして自己の意見を吐露することに経験を積み、然る後ち記憶演説に進み、自己の意見を豫め脳裡に記憶し、それを草稿を読む如くに自由に脳裡より抽出し、聴衆の前に吐露するやうに訓練しなければならぬ。何れにしても演説は

自己の思想を確實にすることが第一であつて、思想が既に不確實であつては、如何に演説の形式に通じたからとて決して大演説を試みることは出来ない。

即席演説

前述の如く記憶演説は、種々なる意味に於て最も優れたる形式には相違ないが、然し若しも低度な、價値なき思想を述べたる演説にこの形式を適用することゝなると、單調にして且つ聽衆に迫る力の乏しいといふ弊害がないではない。故に、演説家が若し自己の思想、若しくは意見が他に優れたるものとの自信を有するならば或は記憶演説に依て其の思想、意見を發表するのが適當であるかも知れないが、然し單純なる思想、低度な知識、若しくは際物的意見等すべて演説家自身に於て、既に極めて軽い気分を持続してなし得る演説ならば、其の場合は彼の即席演説な

る形式に依て試みるのを最も善き方法と心得ねばならぬ。故に、目今あらゆる社會の演説なるものを見渡すに、議會演説、學術演説等の特殊なる演説を除いては、多くの場合此の即席演説なるものゝより多く試みられつゝあるを知ることが出来る。勿論、此の即席演説なるものにも他の何れの演説にも見出さるゝが如き缺點がないではない、又た他の何れにも見出さるゝが如き特質もないではない。而して即席演説は最も深く本質的に批評するならば、其の根本に偉大なる缺點を有する。即ち即席演説は、多くの場合、文字そのものゝ示す如く深き思索と、適當なる準備とを有するものではなくて、不意に試みるものであるから従つて演説の資材、順序等の整頓選擇に際し、演説家自身が全く困亂に陥る場合が多い。故に、餘程の熟練家でないと、此の即席演説には容易に成功するものではない。然し乍ら既に述べたるが如く演説は、元來會話と其の本質

を同じうするものであり、而して會話は多くの場合吾々が決して會話をものに對して適當なる準備、若しくは周到なる注意を傾倒してするものではなくて、全く即座に自由に試みるものであるから、此の會話の形式に従つて試みさへするならば、決して失敗に終るものではない。即ち吾々は、平常他人と會話する際に於ては、自ら話してゐることは大した注意を傾けてゐるのではなくて、多くは殆んど無意識的に、無理解的に極めて輕くなしてゐるが如くに、即席演説の際にも、必ずしも明確なる思考を経ずして半ば無意識的に、若しくは半ば無理解的に試みる事が出来る。其故、何れも經驗ある演説家になると、即席演説を試みた際に、演説が終つて全く冷靜に返つた後に靜かに考へて見るに、自分は果して如何なることを話したが、少しも知らないやうな場合がないでもない。自分が話してゐたことを少しも知らなくても、尙ほ容易に演説は出来る

ものであるといふ不思議な經驗は熟練せる演説家の屢する所である。其故、即席演説家は、他の演説家と同じやうに、常に自分の目前にある問題に對しては周到なる注意を拂ひ、且つそれに對する自己の意見を確立し置き、而して如何なる場合に於ても、直ちに聽衆に向つて自己の確立せる意見を容易に、秩序正しく述べ得るやうな習慣を養はねばならぬ。此の喜ばしき習慣は、完全に形成せらるゝまでには、何人にあつても、可成永き時日と、可成多き實驗を要することは勿論である。殊に何れの事物に對しても常に多大の力を注かねばならぬやうな初歩者は、此の即席演説に對しても一層多くの努力を拂はねばならぬことを忘れてはならぬ。此の喜ばしき習慣の確立せらるゝまで、若しくは自ら演説家として自信を有するに到るまでは、他の基礎的ならざる方法を犠牲にする位の精神を以て、只此の習慣の確立の爲めに多くの努力を拂はねばなら

聴衆との親和

以上述べたる所は、主として演説の形式に關することであるが、更に頁を追ふて演説家の斷じて忘れてはならない樞要なる事項に關して一層詳細に述ぶるであらう。

演説家がひとたび演壇に立つと、自己の意見を陳述することのみ全力を注いで、聴衆に對して注意を拂ふことを忘れてゐるのは、これ眞に默過する能はざる、大なる缺點である。演説家が聴衆に對して何等の注意をも拂はないやうでは演説そのものゝ内容が如何に勝れたるものであつても、其の效果は極めて少いものとなる。蓋し演説は前述せるが如く、結局聴衆との會話であるから、演説をなしつゝある間にも、絶えず兩眼聴衆の上に放ちて、自己の演説が聴衆に對し果して如何なる影響を與へ

つゝあるかを仔細に觀察せねばならぬ。即ち不斷の注意を以て聴衆の精神状態を感覺し、自己の演説が果して聴衆の精神と不斷の交響をなすつゝあるか否やかを觀察し、而して其の結果に従つて自己の演説に多少の變化を與へ、絶えず新しき氣分を以て聴衆と接してゐなければならぬ。若し斯くの如き周到なる注意が拂はれてゐないとすれば、演説家の演説と、聴衆とは全く何等の交渉も、關係もなきものとなり、従つて聴衆は縱令演説家の思想をば何等の疑ひも懐くことなくして、正當に理解するも、それは單に理解するに止り、少しも感動せらるゝことなくして、冷やかなる傍觀的態度、若しくは辛辣なる批評的態度を取るやうになるばかりでなく、更に一層甚だしくなると、單に言語の煩瑣なる連続であるかの如くに看做して、少しく嫌憎若しくは侮蔑の情を湧起せしむるが如き眞に悲しむべき結果を見るは、決して稀れなことではない。若し之に反

して演説家が聴衆に周到なる注意を傾けし、自己の思想と聴衆の思想との緊密なる融和、自己の感情と聴衆の感情との喜ばしき交流等に多大の努力を拂ふならば、決して前述せるが如き悲しむべき結果を見ることなく、聴衆の眞實なる観喜と、感動との中に演説を終了することが出来るのである。此ことに就ては、大隈侯も嘗て言つたことがある。即ち「吾々が絶えず観喜し、感動しつゝ聴くことの出来る演説がある。斯くの如き演説をなす演説家は、即ち演説の最高要素にして且つ最も神秘的なる技術の一つとも言ふべき、聴衆と親和する技術、その技術を習得せる人である」と。

演説家と、聴衆との間に適當なる親和が保たれないとすれば、前述の如く演説家の思想、感情は聴衆の思想、感情と直接に交流することなく、單に言語の煩瑣なる連続の如くに響くもの故、如何なる場合に於ても、

演説家は聴衆と思想及感情が直接に交流するやうに其處に親和の感情を創造せねばならぬ。不斷の努力を以て此の親和の感情の創造に従事しないならば、其の演説は遂に直流性、即ち思想及感情の直接交流する特性を缺いたものとなつて善良の効果を齎らすことゝはならない。斯くの如き直流性に乏しき演説は常に勝れたる聴衆の注意を喚起するものではなく、更に平凡なる聴衆には全く無意味なる演説と思はるゝ場合が多い。説く所の思想は價值あり、使用する所の言語は極めて適切なるものであり、演説振も勝れたるものであり、音聲は正確にして輕快且つ抑揚眞實であつても、直流性に缺いてゐたとすれば、決して眞に迫るものではない。従つて聴衆を感動せしむるものではない。縱令演説家が如何程熱心に思索するとも、聴衆と親和せず、聴衆の思想、感情と直流することなかつたならば、彼は單に演壇に立ちて獨り言を繰り返してゐるに過ぎない。

い。斯くの如き演説家の演説に接すると、吾々は「彼の演説家は吾々の頭に話すのであつて、吾々の心に話すのではない」といふやうな感じがしないではない。彼等は、成程彼の頭の上で、秩序正しき言語を以て談り、且つ吾々の頭を見渡し、若しくは吾々の方へ眼を向けるが、然し乍ら彼等は、吾々の存在を實際には意識してはゐない。彼等は、獨白又た獨白と絶えず同じことを繰り返してゐるに過ぎない。

然し乍ら眞の演説は決して斯くの如き獨白ではなくて、全く會話である。更に適切に言ふならば吾々に話すといふよりは吾々と話すのが眞の演説である。全く聴衆との會話である。故に、聴衆は演説家に對する返事として質問、喝采、若しくは不賛成を暗々裡に想像してゐるものである。一方演説家は、聴衆よりの返事、即ち質問、賛成、若しくは不賛成等の叫びの起るのを絶えず注意し、決して聴衆の意見を無視してまでも

自己の演説を續けるものではない。斯くの如き事實の存在するよりして吾々は、演説の直流性を認識し、且つそれに依て始めて演説が完全に成功するものであることを主張するのである。而して此の直流性は如何にして得べきかといふに、これは演説家自身の精神の態度から又た演説家の精神と、聴衆の精神との適當なる融和から來るものであつて、演説そのものゝ内容から來るものではない。其故、此の直流性は、全く演説の神秘的なる奇術と看做しても差支はない。此の直流性の現はるゝならば、演説家の演説は直ちに聴衆を親和せしめ、聴衆を信服せしむることが出来る。

米國の前大統領ルーズベルト氏は此の神秘的奇術を最も好く適用する演説家であると言はれてゐる。其故、氏の演説は、最も飾り氣の多い米國の演説家から、ルーズベルト氏は決して雄辯家ではない、と評されて

来た。何故かと言ふに氏の演説は、言辭に巧みでもなく、演説振りが雄
 大でもなく、音調、及柳揚の妙あるでもなく全く會話的であつて、一般
 に所謂米國式の演説家の演説の如く花やかでないからである。然るに従
 來氏の演説を批難してゐた人々も、近來になつては全く態度を一變し、
 氏の演説を以て最も効果ある、最も老練なる演説であると評するに至つ
 た氏は演説をするに際しては、決して單に自己の意見を獨白することな
 く、絶えず聴衆と應答し、或る場合には、「諸君は如何御考へになります
 か」とか、若しくは「これで宜いではありませんか」とか言つて、單に
 言語を連絡せしめて自己の意見を説くといふよりは、寧ろ聴衆と意見の
 交換をするといふ具合に、全く會話的に試み、又た或る時は、「如何です
 か、如何ですか」と繰り返して聴衆の意見を聴き、最後に「さあ諸君喝
 采を叫ぼうではありませんか」と言つて聴衆の音頭をとる故、聴衆も遂

に氏に従つて喝采を叫ぶといふことである。
 氏の如く聴衆と直流的に意見の交換をすることゝなると、勢ひ勇氣と、
 自制とを要するものである。而してこれは決して演説家が聴衆の前に現
 はれて全く夢中にならない爲めの豫防からといふ意味からでなく、多數
 の聴衆の思想を支配し、指導せねばならぬといふ必然的要求から來るも
 のである。即ち斯くの如く會話的、若しくは談交的に演説を試みるなら
 ば其處に必ず演説家自身の意見の正反對の意見の現はるゝことを豫期し
 なければならぬ故、其の際に於て勇氣と、自制とがなかつたならば、
 演説家は必然に他の正反對の意見に壓せられて、自らの意見は少しも貫
 徹せらるゝことなくして、演説そのものは遂に何等の效果をも齎らすこ
 とゝはならないから、従つて演説家は勇氣と、自制とに充ち溢れてゐな
 ければならないのである。

思想及感情の直流に關して更に眼の効果を力説せねばならない。演説家が演壇に立つた場合に於て音聲が思想及感情の直流に偉大なる効果あると共に、眼も亦た劣らざる効果を齎らす所の重大なる要素である。演説家が演壇に立つと、自らの眼を或は聴衆の頭上に、或は通廊に、或は親しみのある場所へと配るものである。然し乍ら演説家がひとたび自己の眼が、聴衆の眼と出逢ふならば、彼は直ちに自己の眼を他に轉せしめて、出逢ひたる聴衆の眼と別れさせる。殊に青年演説家は、彼等が單に神經的であると言ふ所からばかりでなく、演説中更に思想を正確ならしめるといふ所から已むなく眼を他に轉せしむるか、自己の足の下のあたり眼を落すか、若しくは天井の方へと上げるやうにするのが一般の習慣である。然し乍ら一旦自己の思想が纏つたならば、直ちに眼を聴衆の方へと傾けねばならない。而して此の際に於ける演説家の思考せる範圍の

ものは勿論、聴衆と親和することに依て最も善く刺戟せらるゝ所の對象となる所のものでなければならぬ。演説家が壇上に立ちて眼を働かす際には勿論、眼の前にある聴衆の幾多を部分的に觀察することを等閑にしてはならない。然るに多くの演説家は、此の重大なる點を意識せずして、演説する際に、殆んど始終聴衆の一方のみと話してゐるやうな悪しき習慣を有してゐるが、これは非常なる誤りと言はねばならない。斯くの如き誤れる習慣に従つて演説すると、幸ひに演説家が眼を向けて話をしてゐる方面の聴衆は、演説家と言ふべからざる親和の情に驅られて緊張した氣分を持続して意見を聴くことが出来るが、然し乍ら他の殆んど願みられざる方面の聴衆には、少しも親和の感情の起ることなく、従つて演説に興味を感ずること薄く、且つ何となく動搖し易いものである。斯くの如く他の一方面的みを相手に

して話をするやうな悪しき習慣的姿勢は必ず制することに努めねばならない。そして聴衆全體を相手にして話してゐるといふことを聴衆に感ぜしめなければならぬ。

演説家の注意

演説家が演壇に立ちて自己の演説の中に會話的本質を發揮する際には其の演説は、全く完全に、且つ最善なるものと看做す傾向がある。而已ならず演説家は、他の形式の演説に於てよりも、會話的に演説を試みる際には、自己の特性を悉く發揮するものである。然し乍ら斯かる際に、若しも其の演説家が平常の會話に下手であつたならば、會話的演説に於ては其の拙劣さが一層擴大せられ、鮮明にせられるといふ不利益が必然的に伴ふこととなつてゐる。誤れる發音、不明瞭なる論述、鼻音的、若しくは方言的聲調、咽喉部より發する嘎聲、音聲の不正、等は等の會話

の際に現はれる缺點等は、演説の際には一層鮮かに現はれて、其の演説をして何となく不愉快なる感情を湧起せしむるものである。

すべて技術の論理的研究は、其の技術に於て幾許かの成功を收めたる後にすることゝが最も利益あるものであるのみならず、技術の論理的研究は、研究者が眞實に重大なるべき筈の技術的事柄をば、少しく重大なるも左程重大なるものではないものと看做してはならないといふことを條件とする。然るに、以上種々なる缺點を述べたるが、其等の缺點を述べたるは其等の缺點は、會話的演説の種々なる條件を修得する以前よりも、寧ろ其の後に於て述べべきものなるが、然し是等は全く演説の根本問題であり、且つ是等を知らずしては所詮演説なるものをなし得ざるものであることを知るからであり、而已ならず演説は單に音聲、ゼスチア、一等の問題であるかの如き誤れる概念をば、根本的に打壊せんとする些

かの努力に過ぎない。

以上演説に現はれる種々なる誤謬を指摘して来たが、尙ほ茲にも會話的に試みる演説家が、依然勝れたる演説家ではないといふ理由は容易に指摘することが出来る。即ち會話的に試みる演説家の演説は、其の言語に強烈なる力のなきこと、思考及順序に不注意なること、知識及純粹論理に欠くること、若しくは聴衆に對する正當の理解を欠くること、想像力の不充分なること、熱誠と精力とを欠くこと、其他演説家そのもの、人格が極めて不愉快なるものである場合に於ける感化力のなきこと等は、すべて會話的演説に著しく現はる所の缺點である。

然しながら是等の種々なる缺點も、演説を以て全く會話の擴大せられたものである時には、徐々に消滅し行く傾向があるといふことを指摘せねばならぬ。例へば吾々が吾々の聴衆に對して正當なる理解を有するや

うに努力するならば、其の際吾々は平常の會話に於てよりも尙一層の努力を以て吾々の演説即ち擴大されたる會話をして一層明瞭ならしむるに相違ない。即ち吾々の會話の相手は單なる一人ではなくして、多數なりと理解した際には、吾々は吾々の會話をして一層明瞭ならしむるやうに努力するに違ひない。そして斯く努力することが其の際に於ける吾々の一切であると思ふに違ひない。又た内氣なる性質の人が演説をなす際には、何處どなく氣がひけて音聲も從つて震ひることもあるが、然しそれも演説を演説と思はずに、單に擴大せられたる會話に過ぎないと思へば、決して斯くの如き結果に陥るものではない。否却つて特別な音聲を出すに、平常使ひ馴れたる音聲を出す故反對に善き結果を齎らすとがある。青年演説家が餘り早口に演説をするならば、其の効果は餘り大したものではあまいが、然しこれは必ずしも努力に依つて矯正し得られない

ものではない。そして其の努力の如何に依つては効果の減退よりは、寧ろ増大する結果を見ることが出来る。或る演説家になると、一生懸命になつて自己の用ふる言葉の全内容を實現しようとするものであるが、然し斯くの如き企ては決して喜ばしき効果を齎らすものではなくて、却て他の必要なる部分を忘却して了ふこととなる。故に、斯くの如き企てをなすよりも、寧ろ聴衆と親しく談るといふやうに努めるならば、彼が言葉の内容は彼自身に於て實現に努力しなくとも、聴衆の方に於て自ら努力して實現するものである。のみならず、演説家が更に聴衆と一層親和するならば、聴衆の彼の演説に對して如何なる態度を持してゐるか、彼の意見や、感情などを眞に理解してゐるかを容易に觀察し得るものである。

以上述べたる所に依て、殆んど實際的端緒を知ることが出来る。先づ

最初に心得ねばならぬことは、演壇に立ちて少しも恐怖しないやうに努めること、聴衆と親しく話すことに馴れること等である。多くの人は、演壇に立つと、何となく亂れて、且つ或る既成の悪しき習慣のために容易に以上の必要な條件を實現することが出来ない。而して此の悪しき習慣、若しくは心の亂れから完全に解放せられる爲めには、必ず如何なる場合にも會話の本質的條件を理解してゐなければならぬ。此の理解なくして演説を以て會話の本質に依らざる特殊なるものと心得るに於ては、必ず失敗に終るに相違ない。演説家が此の法則に従つて演説を試みるならば、如何なる場合に於ても、自己の意見を述べるとき、最も力強く、最も變化に富める言語を以て聴衆を思ふ通りに感化し、指導するところが出来ぬ。何よりも最初に自己の觀念即ち意見を確實なるものとなし、而して其の確實なる意見を聴衆に披瀝する爲めには、聴衆に話すといふ

よりは、寧ろ聴衆と話すといふやうな態度をとることが極めて肝要である。決して不明瞭な曖昧な言語を用ひてはならない、言語はすべて自己の確實なる思想を表現するものであるから、未だ自己の思想が確實にならない中に、それを表現する言語を用ひてはならない、演説家はすべて言語を用ふる際には、其の言語の意味が自己の臆裡に明瞭になるまでは決して使用しないやうな習慣を構成しなければならぬ。

吾々の肉體的習慣であつてすらそれが完成には多くの努力を要するものであるから、況んや精神的習慣を構成するには一層多大の努力を要すること明かである。而して此の演説上の精神的態度を決定し、且つこれに依て如何なる場合に於ても演説を試みるやうにするには、幾多の経験を要することは固より言ふまでもない。殊に演説に於ては、吾々は、吾々の思想及感情を會話の際よりも一層廣く、且つ正確にすることを好む

ものであるが故に、従つて其の表現法に關しても多大の注意を拂ひ、そして其の表現の力を一層向上せしめねばならぬ必要がある。而して此の要求を完全に充實する爲めには、常に幾多の経験を集積しなければならぬ。言語は言ふまでもなく觀念の表徴であるから、一の言語を用ふるには、其の言語を表徴する所の觀念を明確に理解してゐなければならぬ。同一の觀念を表徴する種々なる言語があるから、吾々は或る一の觀念を表徴するにも、常に同一の言語を屢々繰り返して使用することなく絶えず種々なる言語を用ひ、或は自ら獨特の言語を創造し、或は既成の言語を種々巧みに變化せしめて、以て演説に華かなる光彩を添ふるやうに努めなければならぬ。斯くして始めて吾々は言語の表徴する眞實ある觀念を、聴衆の心裡に訴へることが出来るばかりでなく、吾々の思想及感情と吾々の言語とが眞なる調和の状態に到達することを出来る。

第三章 音聲の整調

音聲の音楽的整調

美しき音聲が、演説家にとつて偉大なる價值あるといふ事實は、今更茲に暇々すべくもあるまい。而かも演説に於てのみならず吾々のあらゆる日常の交友に於ても美しき音聲は、常に偉大なる價值を有するものであることは茲に説くまでもあるまい。而して以下に説ける所のものは、演説に於けると同様に、會話に於ても多くの注意に價するものであるが、然し乍ら演説家にとつては音の美しきと同時に、明瞭で、心地よく、如何にも表情的であり、且つ烈しき長時間の演説に堪え得るやうな音聲は、最も有益なものであり、且つ満足的なものであると言ひ得る。

音聲は先づ明瞭なることを以て第一とする。音聲には人も知る如く種々ある。響聲、大聲、強聲等あり、尙ほ音樂の方面ではこれを高音、中音、低音等に分けてゐるが、何れの演説家も、演説をする際には是等の音聲の何れかを以て試みることもなつてゐるが、然し是等の何れの音聲であつても明瞭を缺くに於ては決して聴衆に音樂的快調に富める響きを與ふるものではない。即ち音聲は、高くして明瞭なること、強くして明瞭なること、低くして明瞭なることを必須の條件とするのである。演説家にして若しも此の法則に従はずして、徒らに不明瞭にして曖昧なる響きを與ふる音聲をば、何等の顧慮する所なくして出すならばそれは單に野犬の咆哮するに等しきものであつて、決して聴衆に快感を與ふることはならない。吾々が若しも他人と會話する際に、極めて不明瞭なる音聲を以てするならば、對話者は決して心地よく吾々の談話を聴取するも

のではない。演説家の演説が若しも聴衆に明瞭に聴かれなかつたならば、寧ろ最初より演説をしなかつた方が却て善いと言はねばならない。又た演説家の音聲が不明瞭な爲めに、聴衆がこれを容易に聴くことが出来ないとすれば、其の演説家は、聴衆の注意力を徒費せしむるものと言はねばならない。不明瞭な音聲を出して演説をする演説家は、單に聴衆を退屈させ、嫌悪させるに過ぎない。

「私の意見が幸ひに諸君の同感を得ることゝなりますならば、私にとつては實に此の上もない歡びで御座います」

といふやうなことを言ふ際に、若しも其の演説家の音聲が不明瞭であつたならば、聴衆の耳には、單に「私」とか「諸君」とかやうな言葉のみが響き來るに過ぎない。吾々日本人は、通弊として話をする際に、語首のみを強くして、徐々に音聲を低くし、やがて語尾に到る頃になると全

く聴取し得られないやうになるものである。故に、演説家が演壇に立つと、多くの場合「諸君」とか「私」とか、「而して」などいふやうな主として句の首となる言葉は力を入れて發音し、然る後徐々低下させて行く故、不明瞭な音聲を出す演説家になると、語勢の強い「私」とか、「諸君」とか、「而して」とかいふやうな言葉が、聴衆の耳に響くのみで、他の説明句は少しも理解せられないことゝなる。眞の雄辯家は、斯くの如く徒らに句の始めにある言葉をのみ強く發音することなく、眞に聴衆に訴へねばならぬ主要なる部分に對してのみ語勢を附し、他の句は一般の抑揚法に従ひて發音するものである。

音聲の明確に、更に音聲の力を附屬として考へねばならぬ。然し乍ら音聲の強いといふことゝ音聲の高いといふことゝを混同してはならない。高い音聲には強さが伴ふものであるといふ一般的想像は、決して妥當な

るものではない。然るに世の多くの演説家、教師等の中には、此の要當ならざる想像、若しくは觀念に支配せられて、聽衆の前に立ちて徒らに高聲を擧げて話を續ける結果、幾許もなくして自らの音聲は嘎れ、已むなく叫び聲を擧げ、却て聽衆に不愉快なる感情を抱かしむるが如きものあるは眞に遺憾であると言はねばならない。尙ほ發音はすべて明確に切り、多くの場合母音と子音との結合は、最も調和的になすことが肝要である。此の調和が最も完全になされると、言語は恰も音樂的快調を帯び來り、聽衆の感情をして幽婉なる音樂に接するが如き幻惑的情態に導くことが出来る、所謂聽衆を酔はしむるとは即ち此の情態を目して言つたものである。故に、此の快調なる響きなくしては、あらゆる演説は其の效果を得ることに多大の困難を感じる場合が多い。吾々が若し知名なる演説家の演説を聴くならば、必ず此の快調なる音樂的音調に幻惑せられ、

暫しは全く恍惚的情態に陥りゐるを経験することが出来る。

音樂的整調の秘訣

音聲を音樂的に整調する方法は種々ある。而して是等の方法は、世の音樂家の常に苦心する所であつて音樂家の苦心の結果に得られたる方法は、直ちに演説家にも殆んど無條件的に適用することが出来る。而して是等の方法の中に於て、最も明瞭にして、且つ些かの疑問を容るゝことなくして一般的に適用し得る方法は、左の如きものである。即ち、

- 最も充分に呼吸すること
- 音調を出來得る限り精化するすること
- 言語と言語との間に於ける音の高低を自由に變化せしむること
- 發音を明確ならしむること
- 聲量及聲質に注意すること

而して是等の問題は、何れも簡單なものではないが、然し乍ら決して訓練に依て修得し能はざるものではない。否、あらゆる音楽家は、是等をば何れも練習に依て修得することになつてゐるのである。故に、吾々の演説も、此の方面に於て既に充分の練習を積んでゐるとすれば、是等の困難なる條件も、やがて最も自然的に、最も自由に實現することが出来る。従つて其の演説にも一種言ふべからざる精力と、光彩と、快調を帯ぶるやうになることが出来る。

音聲の明確を期する爲めには、決して唇や舌をば特殊的に、不可思議的に運動させてはならない。斯くするならば、唇や舌等の發聲機關を硬はらせる以外に何の効果もあることはない。斯くの如く特殊的に、不可思議的に運動させるよりも寧ろ一般的、自然的に運動させるより外はない。又た音と音との結合を不自然的に、無理にしてはならない。すべて

舌唇の運動は、軟かくしなやかにするを以て最も適當とする。

一般的練習を何處までも耐忍して繼續するならば、遂にあらゆる發聲運動は極めて自然的に、自由なるものとなるが、故に、適當に、音聲を用ふるならば、音聲は用ふれば用ふる程、益強くなり、且つ一層永續的になるものである。而して音聲の響應性は、必然的に下に説く所より來らねばならぬ。即ち演説家が眞に信せざる思想、眞に實感せざる感情を表現する際の音聲が、どうして聴衆の心情に響應し得よう。徒らに煽動的言辭を弄する演説家の口唇を發する音聲が、どうして充分に、且つ自由響應し得よう。言ふまでもなく演説は眞なる思想、純なる感情の發現が、其の本來の特性であるが故に、虚偽なる感情、不信の思想の發現は如何なる場合に於ても決して許さるべきものではない。思想及感情等の眞偽は、極めて正直に其の發現の際に於て、音聲の上に現はるゝもの

であるから、如何なる雄辯家と雖も、これを欺くことは出来ない。
 音聲をして他に響應あらしむるには、音そのものが軟らかでなければならぬものであり、且つ其の變化に於て、音節に於て何れも自由であらねばならぬものであり、更に音聲の品位が優れたりものであり、豊かなるものであり、そして複雑なる思想、感情を表現する爲めに、其の音彩も亦た複雑なるものでなければならぬ。故に音聲が餘りに膠着性のものであり、餘りに制限的のものであり、餘りに硬性のものであり、且つ音彩に乏しきものであるならば、複雑多彩にして且つ變化に富める思想及感情の發現には決して適することなく、全く單純明白にして且つ死したる事實を發現し得るに過ぎない。

音聲は決して無理に、不自然的に出してはならない。世の演説家、殊に初步の青年演説家になると、自らの音聲の如何を顧みることなくして、

他の雄辯家の音聲に幻惑する結果其の音聲を出さんとして無理に、不自然的に試みるものが多い。斯くの如きは全く發聲機關の根本を誤るものであつて、何等の利益も効果も齎らすものではない。多年の、熱心の練習に依て自己の音聲を改善することは、決して不可能なことではないが、然し乍ら他の雄辯家の華かなる音聲を模倣して直ちに自己の音聲を改善せんとするは、眞に危険なること言はねばならぬ。若し演壇に立てる際の自己の音聲が豊かなる上低音、若しくは本質の音聲が上低音ではなくして中音であるにも拘らず、上低音の音聲を出さんと欲したからとて、無理に上低音を出さうと試みてはならない。若し斯くの如く無理に、不自然的に音聲の變化を試みるならば、絶えず咽喉部を害し、爲めに音聲は極めて非音樂的なる所謂のど聲になるやうな危険がある。演説家は斯くの如き危険には觸れないで、與へられたる自己本來の音聲をば能ふ限

り音楽的に改善して行くことこそ最も安全なる方法である。尚ほ無理に不自然的に改善しなくとも、自己の望む所の上低音をして完全に、自由に役に立つまでは、寧ろ音量を増加せしむることに依りて、自己の音聲を改善して行くことが出来る。復雑多彩にして、且つ其の音性の柔軟なる音聲は、非常に鋭敏なる耳を有する人に對する場合の外は、一般に眞實の音聲よりは非常に低く響き來るものである。其れ故、彼の有名なる雄辯家ウヱヴスターの音聲は、低音であつたと記録せられ、又た有名なるリンコーンの音聲は、氏が演説に熱中した時には極めて音楽的であつたにも拘らず、演説の始めには非音楽的であつたとすら言はれてゐる。何れの人にも、其の人に最も相應しい主調音があり、そして其の主調音を出すことが其の人にとつて最も容易で、最も自然的であり、そして何れの人にも皆な此の主調音を基礎とし、それより或は高くし、或は低く

し、更に或は強くし、或は弱くし、かくて或は感激したり、或は沈衰したりなどする際の氣分に應じて發聲するのであると言はれてゐる。此の音聲の自由なる運動があればこそ、吾々は自らの音聲を愉快にしたり、又は表情的にしたりなどすることが出来るのである。其の故、吾々は此の原則を無視して以て、不自然的に高い主調音を作り出さうとするならば、何時しか吾々の音聲の表現力を減退せしむるやうな悲しむべき結果に陥ることを記憶せねばならぬ。動もすれば習慣になり易い此の過失は、第一に極度に緊張せる神經過敏の状態に於て演説することより來るものであつて、此のやうな情態に至ると、全く事物を公平に判断したり、又は聴衆と公平な態度に於て接することが不可能になり易い。故に、若し演説家が此のやうな情態に於て演説してゐると氣附いたならば、演説を暫らく止めて慎重な態度をとり、やがて自己の演説をば極めて軽い、自

然るな會話的演説に入るやうに努めなければならぬ。教師は此の過激な神經的演説をば、生徒の傾向や、それに對する答辯などで以て全く打破することが出来る。即ち教師が何等かの感激的な問題に觸れて、それが爲めに自己の講義即ち演説が極めて緊張し、神經的情態に陥つて、已むなく自己の音聲も不自然的な調子を帯ぶるやうになつたとしても、生徒からの質問でもあると、それに答へねばならぬ故に、自己の最初の過激な神經的演説を中止せねばならぬこととなり、何時の間にか極めて自然的な態度に於て演説をするやうになるものである。然るに演説家は、多くの場合聴衆より答辯の責任を有する質問の發せられるものではなく「屢々無責任なる彌次的質問は出るが」殆んど全く最初の情態を持續して演説するもの故、過激的な神經的情態は、これを外部より制せらるべき機會に乏しく、従つてこれを自らの力に依て制せねばならぬこととなる。

演説家は、此の意味に於て教師よりも一層不幸なる位置にあるものと観ねばならない。

尙ほ吃音、其他發聲機關の不完全より來る特殊なる故障等は、夫々専門家の手に依て治療し得るかも知れないが、然し何れにしても、音聲の練習は、單獨にて試みるよりも、寧ろ教師、若しくは聽覺の極めて善良に訓練せられたるもの、嚴正なる批判に依てする方が、最も正確である。單獨にて練習する際に、若し自己の聽覺が極めて不完全なものであつたならば、自己の音聲を嚴正に批判することが不可能であるから、従つて練習の過程に於て或る何等かの過失に陥らないとも限らない。

調聲の實驗

あらゆる音聲の練習は、規則的に、熱心に、巧妙にしないでならぬ。殊に中年以上の演説家であるならば、青年演説家と違つて練習が困

難であるから一層多くの練習を積まなければならぬ。而して演説家が
 若し自己の音聲を改善せんとすれば、少くとも一日に十五分間位づゝ二
 回は練習しなければならぬ。少くともこれ位の練習は積まなければ容
 易に悪しき音聲は改善せらるべきものではない。然し乍ら或る何等かの
 仕事の爲めに非常に疲勞してゐるとか、若しくは精神が疲憊して極めて
 不活潑な状態にある時は決して練習をしてはならない。そして練習はす
 べて自由に、而かも自然的になし得るやうな場所に於てするのが最も有
 效である。故に、古來より演説は海岸、若しくは深山に於て、親しき友
 の一人乃至二人が傍らに立つてゐて音聲の批判をなし得るやうに試みる
 のが最も有效だと言はれてゐる。

生理學者の研究する所に依れば、吾々の音聲は、吾々の呼吸と重大な
 關係を有するといふことである。即ち呼吸の大きい人は、音聲も從つ

て大きく、高く、強く、之に反して呼吸の小さい人は、音聲も小さく、
 低く、弱く、音聲と呼吸とは常に一致せる關係に於て其の高低、強弱の
 差別が現はれ、決して其の一致せる關係を亂すことがないといふことで
 ある。故に音聲の練習は、遂に呼吸の練習となり、呼吸をして完全に音
 樂的ならしむるならば、從つて音聲も亦た完全に音樂的なことが出来る
 といふのである。吾々は此の原則に従ひて、茲に最も興味ある呼吸の練
 習法を掲げて見たい。

- 一、床の上に俯向に姿勢正しく横はり、片手を胸の上に正しく置き、
 他の片手を胸部を十字に切るやうにして背部に置き、そして平常
 の呼吸を續けて、呼吸の本質を研究せよ、然る時に果して胸部の
 如何なる部分が動くか、胸の上部に載せられたる手のあたりが最
 も好く動くか、若しくは背部に廻したる手のあたりが動くか。呼

吸が果して規則的であるか、若しくは不規則的であるか、將た緩漫か、急速か。此の實驗を終へたる後ち、其のまゝ直立して更に研究せよ。

二、

一に示したる形にて、緩漫なるも深呼吸を續け、且つ感情を強烈にしたり、若しくは背部にある手を以て微かに抵抗を試みそして其の結果を實驗せよ。

頸部のあらゆる筋肉を弛め、咽喉部を廣開して呼吸を自由にし、吸入の際には横隔膜を壓することなく、胸部の主要部分を壓迫することなく、能ふ限りこれを廣開し、そして胸部の筋肉を弛めて自由にせよ。斯くして毎日々々呼吸を深くし行き、やがて此の作用を極めて容易ならしむる爲めに、心で一二三四と數を計算し、例へば五の數を數へる間だけ吸作用をなし、其の吸入されたる氣

息をば三の數を算へる間だけ保ち、而して其の氣息を五の數を算へる間に放出することにする。然し乍ら此の吸入せられたる氣息は、氣分の悪しくなるまで保留しないやうにしなければならぬ。此の練習に慣れたならば、立つてゐる間でも、往來を歩行してゐる間にでも、如何なる場合に於ても試みることをする。

三、

A 左右の兩手を體の兩側に添ふて延ばし床の上に横はり、體の殆んど中央に於て思ふがまゝに呼吸し、而して舌と上齒との間より微かなる音聲を出しながら靜かに吸入し、出來得るだけ音聲と吸入作用とを一致せしめて微かにすれば、尙ほ吸入は極めて規則的になすことが出来る。

B 更に微かなる音聲を出す代りにアーといふ母音を出して試よ。

四、兩手を心持斜に横にし足趾で立つてゐながら第二、三A、三Bの

實驗を繰り返すならば胸部は、従つて擴張し、そして呼吸は擴大せられ、従つて音聲も、朗らかに自由にすることが出来る。

世に行はるゝ所の深呼吸法とか、腹式呼吸法とかいふやうなものは、若しも完全に生理學的に行はれてゐるならば、其等は皆な胸部及腹部の擴張を來たし、従つて音聲の上にも著しき變化を及ぼすものである。すべて呼吸は吾々の胸部及腹部と至大の關係を有するもの故、胸部及腹部の擴張若しくは退縮は、やがて音量の擴張若しくは退縮と至大の關係を有するものと見て差支ない。其故、音聲の改善は、胸部及腹部の改善に基因する所が多い。此の至大なる關係の存する所より、吾々は茲に自由なる呼吸を以て胸部及腹部即ち一般に胸部と稱する部分を擴張する方法を擧げて見たい。

一、床の上に横はり、片手を胸部に正しく置き、他の片手を横體の背

部に稍斜めに置き、呼吸の調律とは關係なしに、胸部の筋肉を擴大せしめて、横體の上下にある兩手を横體より離さしめよ。而して擴張作用の行はるゝ間は氣息を保留することとし、斯く胸部の擴張せるまゝにして前掲の二、三A、三Bの方法を繰り返して練習せよ。

二、片足を以て床の上に立ち、他の片足は軽く床の上に着くやうにして一の方法を繰り返して練習せよ。

以上は呼吸と胸部及腹部との關係を説き、胸部及腹部を擴張して以て、音量を豊かにする方法を述べたが、更に調聲法に就いて少しく述べて見よう。

片足を以て好く床の上に直立し、胸部を擴げ、氣輕るに充分に呼吸し、同時に顎を垂れ、咽喉部の筋肉を弛め、やがて直ちに急速に、

然し高聲にでなく母音アを發音せよ、斯く數回繰り返へし而して發音を繰り返へす毎に新しく呼吸し、最後に此の方法を正確にするになすことが出來たならば、次ぎには一呼吸毎に母音アを出來得るだけ早くしてア、ア、アと數回も發音し得るやうにせよ。此の方法を正確に繰り返し得るやうになつたならば音量の豊かなる發音を自由になすこと出来る。

以上述べたる所は、單に母音の發音法に過ぎないが、然し乍ら此の方法を何處までも發展させて、母音と子音とを併せて發音させ、更に快調なる韻律のある詩句を發音することが出来る。而して此の方法に馴れたならば更に、更にこれを韻律なき言語にも適用し得、斯くし最後に演説にも適用するてとが出來るのである。故に、歐米に於ては夙に此の研究が行はれ、殊に歐米の詩壇に於ては、詩は氣息なりと、説くもの生ずる

に至り、言語の發聲と呼吸との關係を一層至大ならしむるに至つたのである。即ち呼吸をして一の美しき韻律の下に行はしめ、更に呼吸と至大の關係を有する言語の發聲をも一の美しき韻律に従はしむるならば、纒令長時間に於て多くの音量を放出せしむるに於ても少しも疲勞することなく、演説家は極めて自然的に、極めて音樂的に、極めて效果的に自己の音聲を出すことが出來得る故、演説家は不斷の注意を以て生理的に自己の音聲の改善に努めなければならぬ。

第四章 ゼスチユア

ゼスチユアの定義

演説家にとつて音聲と共に、最も重大なるものはゼスチユアである。ゼスチユアとは即ち姿態、科、若しくは身振といふことであつて演説家

が演壇の上に立ちて演説をする際の態度、演説の内容に應じてなす所の身振を言ふものである。即ち演説家が慷慨悲憤の演説をなす際には、それに相應しい姿態、若しくは身振をなして以て、其の演説をして一層慷慨悲憤的ならしめて聴衆を感化し、或は滑稽にして諧謔に富める演説をなす際には、同じくそれに相應しい姿態若しくは身振をなして、其の演説をして一層滑稽にして諧謔に富めるものならしめて聴衆を哄笑せしむる爲めにとる所の極めて有效なる手段である。而して此のゼスチュアなるものは演説に至大の効果を有するものであつて、若し演説に此のゼスチュアなるものがなかつたならば、如何に慷慨悲憤的の演説を試みたからとて、聴衆は左程感動するものではなく、却て寧ろ一種の冷笑若しくは増悪の感情を以て其の演説家を見るやうな場合がないではない。必ずしも慷慨悲憤的の演説に於てばかりではなくて、如何なる演説に於ても

ゼスチュアなるものに缺いてゐたならば決して効果あるものではない。如何なる演説家であつても、聴衆を感化し、若しくは指導するが目的であるから、其の目的を達する爲めにはあらゆる効果的な手段をとらなければならぬ。而して何人と雖も足一度び演説會場に運んで知名士の演説を聴いたならば、其の際に於ける演説家のゼスチュアが、聴衆たる自分に対して如何に多大の感動を與ふるものかを容易に知り得るであらう。之に反してゼスチュアに乏しき演説家の演説が如何に寂びしく、如何に冷めたく、如何に感動的でないかを容易に知り得るであらう。吾々は現實生活の苦痛から暫しでも解放せられんが爲めに、劇場、寄席、活動寫真等に聊かの誤樂を求めるところがあるが、其の際に於て吾々の目の前に展開せられたる舞臺に於ける役者、浪花節語り、義太夫語り、講談師さては活動役者等の下級藝人に到るまでが、果して如何なる姿態

を以て各自の藝能を吾々に示しつゝあるかを最も注意深く観察するならば、其處に偉大なる事實のあることを容易に知り得るであらう。即ち彼等は單純に自己の知識を語らうとはしない。彼等は率直に自己の藝能を示さうとはしない。彼等は、自己の知識を、自己の藝能を最も効果的に最も感動的に吾々に示さんが爲めに、あらゆる技巧を加へるではないか、故に、吾々は彼等の知識を聞き、彼等の藝能を見んとするよりは、寧ろ彼等の技巧が如何に巧みに洗練せられるかを批評するが如き態度を以て彼等を観る場合が多い。故に、若し彼等の知識若しくは藝能が何等の技巧をも加へらるゝことなくして、單純に、率直に吾々の耳に、吾々の眼に来るならば、吾々はあまりの無趣味さに耳を聳ひ、目を閉ぢて決して彼等の知識若しくは藝能に觸れようとはしない。即ち吾々は彼等が、如何に彼等の興味ある知識を吾々に語るか、若しくは如何に興味ある

る藝能を示すかを見聞せんよりは寧ろ、彼等が如何に興味ありげに即ち面白く語るか、若しくは趣味ありげに即ち面白く示すかを見聞せんとするのである。これを最も簡單に言ふならば、吾々は彼等の知識若しくは藝能を知らんとするよりは、寧ろ彼等が知識若しくは藝能を示さんとする際の彼等獨特の技巧を見んとするに他ならない。彼等の有する知識若しくは藝能は固より吾々に多くの慰安若しくは快樂を與ふる筈のものではなく、吾々は寧ろ彼等の有する獨特の技巧に多くの興味と快樂とを覺ゆるのである。而して彼等の技巧の本質は抑も如何なるものであるかと言ふに、這は音聲其他種々あるべきも、就中、彼等のゼスチユアが最も重大なる要素を占めてゐるといふ事實は何人も疑ふべき餘地がない。高尚なる思想及感情を以て聽衆を感化し、指導せんとする演説家と、單純なる低級趣味を以て群衆に娛樂を與へんとする卑野なる寄席藝人と

を比較するは、恰も演説家を甚だしく軽んずるが如くに思はれるが、然し乍ら演説家も寄席藝人と共に、公開の壇上に於て多数の人々を相手にし、而かも自己の何物かを與へんとするのであるから、其間幾許の類似が見られないではない。殊に演説家のゼスチュアを説く際に於て、ゼスチュアを本位とする寄席藝人を示したるは必ずしも妥當を缺いた實例ではないと信するからである。茲に寄席藝人のゼスチュアが如何に甚大なる感化を吾々に與へつゝあるかを説いたのは、寄席藝人の卑野なるゼスチュアを以て直ちに無條件的に、演説家に強へんが爲めでもない。讀者が此の意味を誤解して以て、寄席藝人の卑野なるゼスチュアを直ちに自己の演説に移してはならない。然るに或る演説家になると、全く此の意味を誤解したるか、若しくは其の人の性格が爾かくなさしむるのか、常に寄席藝人に等しき卑野なるゼスチュアを以て、而かも何等の省みる

所なく、耻づる所なく平然と演説をなしつつあるは眞に笑ふべきことではないか。斯かる演説家が如何に遠大なる思想、若しくは高尚なる感情を吐露したからとて決してそれに依て聴衆は感化せられ、若しくは指導せらるゝものではなくて、却て嫌惡、冷笑、若しくは一種の滑稽の感情を以て接するものであるから、決して豫期したる効果があるものではない。而して此の恐るべき誤解を免れんが爲めに、茲にゼスチュアなる語の定義を掲げることとする。

ゼスチュアなる語は極めて廣い意味を有する語であつて、吾々の思想若しくは感情を表現する際の、あらゆる行爲とあらゆる姿勢を含んだ語である。而して此の語は即ち行爲を意味し、且つ吾々は一般に運動を、殊に手足の運動を意味するものと思惟してゐるが、然し乍ら此の語の眞意は決して手足の運動と限られたるものではなく、思想及感情のあらゆる

る表現運動を意味し、更に一層詳しく説くならば、吾々の思想及感情を表現すべく企てたる行為と制限すべきものではなくて、更に思想及感情の無意識的表現行為をも意味するものと観察するのが最も妥当である。何となれば吾々のあらゆる表現行為は必ずしも意識的のものとのみ限られらるゝものではなくて他に無意識的にする行為もあるからである。ゼスチユアは即ち是等の無意識的表現行為をも意味するのである。

ゼスチユアは斯く広い意味を有し、人生活動に多くの意義を有するものであるが、然し乍ら多くの場合、ゼスチユアなる語は、思想及感情を表現すべく企てられたる行為を意味するものと一般に認められ、従つて他の無意識的表現行為は、これを閑却して殆んど認めないこととしてゐる。

表現の重要手段たる理由

問題に充實し、且つ表現すべき多くのものを有する演説家は、演説家

自身に於て、表現の如何なる手段をも求めるであらう。自己の思想及感情を他に傳ふべく熱心に望む人は、如何なる人であつても、必ずや吾々の日常生活使用する言語の尙ほ不十分なることを感ずるに違ひない。而して此の要求と、不満とのみが、必ずしもゼスチユアが、偉大なる使命以上に、更に一層卓越して嚴肅なる使命を有するに至つた理由を暗示するものとはならない。即ち思想及感情の傳達の手段としてのみゼスチユアが存するのではなくて、人生のあらゆる心的行為、例へば吾々の心裡を瞬間的に通過する、其の本質の極めて輕微なる一個の瑣末なる印象をも、これを他に傳達せんことを切實に欲するものは、必ずやこれを感ずる何等かの行為に移して、而して其の傳達の目的を達せねばならぬことを最も切實に感ずるに相違ない。吾々は此の欲求が行為に現はされたる際に、これを目して以てゼスチユアであると言ふのである。即ち吾々は吾々の

高尚なる思想及感情は勿論、如何に輕微にして、如何に瑣末なる印象であつても、これを他に傳達せんが爲めに、或る何等かの行爲に現はしたならば、其等を目して以て、すべてゼスチユアであると言ふのである。吾々はゼスチユアをば以上の如く廣い意味に解釋するが、然し乍ら又一面に於てこれを狭い範圍に限定することもある。即ちゼスチユアは言語よりは、一層即妙にして、明瞭にして、且つ力強い表現の手段と考へる際にである。何となれば其の際のゼスチユアは、單に人間の眼にのみ訴ふ所の手段であるからである。

演説家が演説壇上に於て、兩眼を會場の入口に送る際の運動、熱心のあまり肩を聳びやかす運動、兩の眉毛を上げる運動等すべて是等のゼスチユアは、果して如何なる言葉に匹敵し得るであらうか。是等は決して吾々の社會に存在する言語を以ては到底表現し難はざるものであつて、

單にゼスチユアに依てのみ表現し得る所のものではないか。此の點より觀察するならば、ゼスチユアは全く疑ひもなく、明瞭なる言語であるではないか。且つあらゆる種族(即ち言語なき種族、言語ある種族等)の人々に依て最も明瞭に、其の意味が理解せられ得るではないか。犬でさへ或る場合にはゼスチユアを理解する、ゼスチユアは實に最も本能的の言語であつて、少くとも吾々の原始的祖先が、未だ明瞭にして且つ音節ある言語を有せずして、單に不明瞭にして且つ音節なき響きを有する調子、又は單純なる動作を通じてのみ表現し得た際の、あらゆる感情傳達の最始の情態を彷彿せしむるものである。而してゼスチユアが吾々の原始的感應方法として恰も本能の如くに、吾々の中に極めて深刻に構成せられてゐるといふ理由から、あらゆる人類は、ゼスチユアを理解するに至つたのである。且つあらゆる人類は、ゼスチユアを理解するに至つたのである。

演説家が、自己の思想及感情を表現する際の熱心の程度は、必ず其のゼスチュアに明瞭に現はれるものである。即ち演説の或る問題に對したる際に、其の問題を輕視するか、若しくは重要視するか、賛成であるか、反對であるか、又た其の問題に對して熱心であるか、若しくは不熱心であるか、嘲弄するか、若しくは嚴肅に觀てゐるか等は、すべて其の際の態度が、身振、行爲又は顔面表情等に明かに現はれて、極めて明瞭なるゼスチュアをなすものである。ゼスチュアは極めて稀れに、ではあるが、少しの興味もなき事實、又は感情と全く離れたる純粹の觀念を表現する際にも適用せらるゝことがある。例へば演説家が、或る銅像を説明する際に、其の銅像が此の位の高さであつた、と、手振を以て其の銅像の高さを説明する際の如き、又は其の事に就いては二つの相反せる原則があるると説く際に、兩手を聽衆の方へ差し出して恰も兩手を二つの相反せる

原則を示すが如くになすやうな場合は、即ち此のゼスチュアが人間の感情とは全く離れたる事實を表現する爲めに適用せられたるゼスチュアである。而して斯くの如き目的に對するゼスチュアの適用は、明かに限定せられてゐる。即ち多くの場合高さとか、長さとかすべて數字を以て明示し得るものを、數字を以て明示せざる場合に適用せらるゝのである。物語、説話の際には動作は非常に適用せられるが、然し乍ら斯くの如き場合は、動作の適用もあると同時に、全身に漲ぎる強烈なる感情的色彩もないではない。言語は觀念、殊に談話と一致して發達し、そして觀念の最も明瞭なる表現となつたのである。感情は、觀念よりは一層原始的のものであるから、原始的人間は、一般に彼等の好き、嫌ひ、喜び、悲しみ、恐怖又は勝利等の如き感情的方面のみを表現して、理性的方面、即ち觀念に關する方面は餘りに表現しない。

吾々は、暗比的性質を示す所の幾多のゼスチユアを有する。例へば他人を呼ぶ時、若しくは拒絶する際に、手を擴げて延ばし、うつかりしてゐるといふことを表現する爲めに、手を軽く投げ出してゐるなど、高貴、崇拜、若しくは尊敬の種々なる心的態度を表現する際に手を高く擧げるなど、すべて是等は心の情態を表現する爲めに、殆んど本能的になす所のゼスチユアである。

以上述べたる所に依てゼスチユアが表現の手段として吾々人類の重要な部分を占めてゐることを説いた。尙ほ此のゼスチユアが如何に廣い範圍のものであり、且つ一般的のものであるかを示す爲めのみならず、更に演説家に必要なことを説く爲めに、表現的行爲即ちゼスチユアの本質を一層廣し考察しなければならぬ。

演説を華やかならしむ爲めのゼスチユア

演説家は、如何なる演説に於ても、ゼスチユアを以て言葉を以てする叙述の補助となさなければならぬ。若し演説家が演説を試みる際に、ゼスチユアを以て言語の補助となすならば、其の演説はゼスチユアなき演説に比して極めて効果的なることを心得てゐなければならぬ。ゼスチユアは實に演説家が演壇に立つた際に、平凡なる状態に陥ることを抑制するものであつて、これあるが爲めに、演説は極めて感化的なものとなり、華かなるものとなる。而して此の疑ふべからざる事實は、演説に多くの経験を積んだ演説家、若しくは多く演説を聞いた経験を有する人々の切實に感ずる事實であつて、如何なる演説家と雖も、ゼスチユアなき以上は、自己の演説が聴衆の心裡に、眞に、直流せるを感ずるものではなく、平凡なる演説の域を脱し得るものではなく、又た眞なる演説家であるとの確固なる信念を有するに至るものではない。而して此の事實は

如何なる演説家、如何なる演説にも適用しても少しも不自然ではないのであるが故に、一世を風靡するやうな偉大なる演説家であつても、ゼスチユアが制限せられたならば、全く悲惨なるものに違ひない。即ち演説家よりゼスチユアを取り去るならば、彼等は決して自由に演説を試み得るものではなくて、それは恰も片足で以て競走をなすやうなものであると言はねばならない。吾々は、ゼスチユアを而かもほんの幼児の時代に於て適用するものである。而して吾々は現在よりも一層多く幼児の時代に於てゼスチユアを適用するものであるが、然し年を経るに従つてゼスチユアが少くなるのは、幾分か、ゼスチユアを不斷に抑制するに依るものである。即ち吾々は幼年時代に於ては、自己の思想感情を言語を以て表現するよりも、寧ろゼスチユアを以てするものであるが、然し乍ら吾々の両親及兄弟等は吾々の幼年時代に於て、一般社會に使用せられて

ある言語を出來得るだけ早く習はしめんが爲めに、不斷にゼスチユアを禁ずる習慣としてあるものであり、而して此の抑制の習慣が構成せらるゝと共に、ゼスチユアは徐々に少くなつて行くのである。固より吾々の社會には觀念や、感情や、行爲やを最も明確に表現し得る極めて洗練せられたる言語が存する故、あらゆる思想感情等を是等の言語を借りないですべてゼスチユアを以て表現すべきものではないが、然し乍ら吾々は決してゼスチユアを適用することを止めてはならない、殊に言語以上に一層の表現に効果ある手や、足を以てするゼスチユアですら中止すべきものではない。

一切は善であるか然らざれば悪である。而して此の言葉は如何なる場合に於ても眞理である。即ち演説に於てもそれが善なるものであるか、若しくは悪しきものかの二つより他にない。演説の研究は、言ふまでも

なく、悪しき演説をば努力に依て善き演説に導く方法を研究するにある。吾々が若しも吾々の仕事に熱心であるならば、必ずや其の熱心が行爲を衝動せしめて、それを行爲の上には現はすに違ひない。そしてそれを爲の上に熱心そのもの、現はるゝを明かに見ゆるに違ひない。例へば吾々が、演説に熱心であるならば、必ずや吾々の熱心が演説の上に現はれて、手振り、足の動き、位置の不斷の變化等に現はるに違ひない。若しも此等の動作が意志を以て抑制せられたならば、演説が極めて不自然なるものに見えるばかりでなく、抑制すること、そのことも亦た如何にも不自然に、醜く見えるに違ひない。即ち此等の動作は熱心が明かに現はれたものであつて、決して不自然なものでなく、却てこれを抑制するところが極めて不自然なのである。而して是等のあらゆる行爲はこれをゼスチュアと呼ぶのである。何となれば是等はすべて聴衆の耳に訴ふるもの

ではなく、眼に訴ふるものであり、且つ是等の行爲に依て演説は、自ら如何に熱心であり、如何に忠實であるかを示すものであり、又た或る場合に於ては、即ちゼスチュアが拙劣なものである場合には、演説家自らが如何に拙劣であるかを示すものとなるからである。すべてゼスチュアは自由でなければならぬ。決して制御してはならない、若し完全に美的に制御せられ得るものならば、少しも不自然なものとはなるまいが、然し多くの場合完全には制御し得られないもの故、出来得るだけこれを自由にすることが最も効果的である。自然的衝動を自由ならしむること、及び思想を強める爲めの手足の動作等は、上着の端を凝視したり、ズボンを動かしてするよりも遙かに善いものである。或る演説家になると、両手をポケットの中に挿し入れたり、背部に廻はしたりなどして、少しも両手をゼスチュアに適用しないものであるが、然し乍ら斯くの如きは、

青年演説家にとつては決して賞讃すべきことではない。何となれば手も足も、ゼスチユアの一部分であつて、演説家は、殊に青年演説家は、大いにこれを利用せねばならぬものであるからである。

吾々は屢、説いた如くゼスチユアは多くの場合極めて自由なるものでなければならぬ。然るにこれを或は抑制し、或は禁壓するならば遂に習慣になつて、如何なる場合に於ても少しもゼスチユアの現はれないことゝなる恐れがないではない。而して此のゼスチユアを抑制し、若しくは禁壓することは、屢、感情の自由なる發現を抑制し、若しくは禁壓することゝなり、而して感情の發現を制御し若しくは禁壓することは更に一層恐るべき感情の死滅へと導くことゝなるから吾々は如何なる場合に於ても感情發現の形式たるゼスチユアを軽々しく禁じてはならない。之に反してゼスチユアに富んだ表現は、感情を一層強烈ならしめ、且つ更に優

れたる感情を創造することゝなるものである。

以上述べたる所よりゼスチユアはすべて衝動より示唆されて起らなければならぬものであつて、決して法則若しくは模倣に依てせられたる單なる機械的動作より起るものではないといふことは明かである。而して斯くの如き内部の衝動に響應して起る外部的表現が最も眞實なるものであらぬばならぬ。吾々の觀念及感情は吾々の根本的原動力であつて、若し吾々が自己の注意を吾々の演説の觀念即ち思想に集中せしめ、且つ吾々が自らの説く所の精神と一致してゐるならば、吾々は自己の行爲即ち演説を示唆する所の衝動を有たねばならない。吾々が若しも吾々の注意を最も力強く或る要點に集中せしめたならば、吾々のゼスチユアを示唆する衝動は、其の點に於て最も力強きものであり、且つ如何なる場合、如何なる場所にゼスチユアを出すべきかに就て多くの不安を懷きゐる青

年演説家は、容易に其の不安から脱却することが出来る。ゼスチユアは其の本質として極めて強烈なる表現的のものであつて、思想の第二義若しくは第三義點を指示するものではなくて、全く最も根本的、最も中心的なる第一義的主點を示標するものでなくてはならぬ。

吾々が若し徹頭徹尾自然的動物であつて、言語、動作等がすべて自然的であり、而して何等の禁制もないならば、従つて吾々は常に自由なるゼスチユアを出してゐる故、ゼスチユアに關しては最早何等の言ふべきこともないのであるが、然し吾々は少しも自然的であることなく、却て吾々の自然的發展を妨害する幾多の習慣的抑制や、禁壓を有するが故に、吾々は常に他に向つて、自然的であると感じてはならない、といふことを屢、繰り返へさねばならないこととなる。即ち吾々は決して自然的であると感じられないばかりでなく常に吾々は、自覺に依て抑制せられゐる。

のである。而して吾々は此の抑制より充分に解放されて、自由に、自然的に生活することが出来ない故に、常に吾々は自己の思想及感情を表現する際に、その拙劣さを感じ、その頑固さを感じるものであり、尙ほ吾々が演壇に立つた場合には一層痛切にその表現の拙劣さと、頑固さを感じるのである。茲に於て吾々は、表現の練習の一要を痛切に感じ、茲に於て表現を示唆する衝動が、示唆に適當なる機會を有つに至るのである。

ゼスチユアの練習法 第一段階

ゼスチユアの練習は、決して急速であつてはならない。練習の第一歩として先づ自由なる精神、自由なる氣分を以てかゝるといふこと、内部的衝動に對する響應性を得ること、即ち自己の外部的行爲が、内部的衝動に直ちに響應する習慣を構成することが最も肝要である。而して此の

習慣を構成するとは、恰度自分自らを少しも制御しない習慣を構成すること、一致してゐる。即ち如何に自由なる精神、如何に自由なる氣分を以て演壇に立つ習慣を構成しようとしたり、又は衝動に反應する習慣を構成しようとしても、演壇に立つた際の自己自らを絶えず制御し、若しくは或る囚はれから少しも解放せられず、少しく恐怖の感念を壊いてゐたならば、決して是等の喜ばしき習慣は構成せられぬものではない。或る何等かの新しき習慣を自己の精神の内に構成しようとするには、不斷の努力を以て新しき習慣の構成を妨害する他の習慣を制御し、禁壓し、而して新しき習慣の構成に利益ならしむる爲めに、自己の精神を自由に解放的にしてゐなければならぬ。ゼスチユアの練習も亦た全く此の法則に従つて、練習の妨害になるものは、すべてこれを禁壓しなければならぬ。先づ兩手をポケットに入れたり、又は背後に廻はしたりして、

兩手を用ゐてするゼスチユアを禁ずるやうなことがあつてはならない。そして如何なる時に於ても兩手を用ゐてゼスチユアを試み得るやうに、自己の兩側に自由に垂れてゐなければならぬ。兩手をば斯の如く自由に、だらりと體の兩側に垂れてゐ、そして若も或何等かの感激的言句を以て演説せねばならぬやうな時が來たならば、聴衆の前に其の思想を發表すると同時に、兩手は其の言句に相應しく感激的に動かさなければならぬ。若しも自覺から解放せられて自由に、自然的に演説を試みるやうな時が來たならば、ゼスチユアにも何等かの變化が、起らなければならぬ。而して此の何等かの變化とは即ち或る奇怪なる、無自覺的なる動作を言ふものであつて、此の際自己の動作が極めて無自覺的にして、且つ奇怪なるものであつても、少しも意にすることなく、其等の動作を極度に強め、そして感激的方法に於て演説を續けなければならぬ。之

に反して其處に何等の變化も起るなく、全く自覺的、自然的であるならば、意識的に、自覺的に自己の動作を感知的、若しくは無自覺的ならしむるために、自由なる動作を以て手を掲げ、如何にも感知的なるが如くに、演説を続けなければならぬ。然るに若し不思議にも手が少しも揚らないとすれば、必ずしも殊更に揚げる必要はない。何となれば斯くの如き殊更なる努力は、多くの場合、不自然的なる結果を見るに至るからである。又た多くの場合斯くの如き状態に陥るものではなく、自己の精神が無自覺的狀態に陥るならば、肉體の行爲も之に反應して必ず無自覺的に動作するに至るもの故、先づ斯かる際は、自ら自らの筋肉を信ずることが出来る。即ち吾々の筋肉は、ゼスチユアをよく知つてゐるものであつて、筋肉は心の行爲の變化に應じて行爲することを忘れないものである。

欠

欠

E、(D)を反對に試みる、即ち先づ兩の肩を少しづつ、揚げる。後ち前膊を垂れて、上膊の筋肉に力をつけ、更に前膊の筋肉は力をつけ、次ぎに拳の筋肉に力をつけ、最後に指の筋肉に力をつける。

五、拳、(A)前膊を肩と直角になるやうに揚げ、上膊を以て、手が腕關節のあたりで自由に動くやうに前膊を振り、(B)掌を揚げて繰り返へす。

六、指、右手の拇指を左手の掌の上に置き、拇指以外の指は右手の掌の裏になるやうにして握り、拇指及他の指が各右手の表裏に於て少しづつ動く位まで右手を振り、次ぎには左右兩手を反對に交互に振る。

七、足、(A)壇若しくは階段の上にて片足を以て均勢を保つやうに立ち、他の片足を壇若しくは階段の端に於て、少しも重量を感せざるまで吊り、やがてそれを前方に揚げ、其の重量の爲めに自然に落下せしめ且つ振動せしむる。然し胴身は決して動かないやうにすること、(B)片足を以て床

の上立ち、他の片足を其の下足部が膝のあたりから揺れるやうにして前方へ揚げ、やがてそれを垂れ下げ、または揚げ斯うして前後左右に上下すること。

ゼスチユアの練習法 第二段階

以上述べたる所の練習法を熱心に繰り返すならば、吾々はゼスチユアの初歩を學ぶことが出来、而已ならず誤れる觀念を排除することが出来、そして少しも自己の心的過程を中止することなく、即ち思ふがまゝに自由に自己の動作を試みることが出来、而して演壇に立ちても全身の均勢を保ち、更に心的過程即ち思想及感情の變化に應じて肉體の動作も自由に變化することが出来る。然し乍らこれを以て完全なるゼスチユアを自由になし得るものではない故に、吾々は更に歩を進めて一層確實なる研究に向はなければならぬ。

最初に、先づ吾々は下の如き疑問が起らなければならぬ。吾々のゼスチユアは果して何を表現するか？ 吾々の手は吾々が聴衆に語りつゝあることを感ずるか？ 此の疑問に對して吾々は特更なる注意を拂はねばならない。或は此の問題は些細なるものであり、或は不愉快なるものであり、或は全く基礎的のものであり、又た高尚なるものであり、感性的なものでもあつて、觀察の如何に依つては決して同一のものとは言はれない。吾々は果して此の觀念を有することが出来るか、即ち以上述べたるが如く吾々の行為は、吾々の思想及感情を理解し、そして吾々はそれに依つてそれが全く談話であつたと云ふことを感ずるといふことである。即ち吾々が演壇に立ちて手を振り、足を動かしてゐる際に、吾々は手や足が聴衆と談話しつゝあるといふ觀念を有つことが出来るか。これが抑、の根本問題である。而して此の根本問題が完全に理解せられてゐない以

上、ゼスチユアは決して理解されるものではない。故に、吾々は茲に於て此の根本問題に對して最も完全に近い解決を得たいと思ふのである。吾々の手が吾々の言ふ所の意味の陰影を表現せんと試み、又た吾々の手が談ることとも疑ふべからざる事實である。然し乍ら此の事實は、往々拙劣なる演説家に依て破壊せらるゝことがある。即ち拙劣なる演説家が少しもゼスチユアなるものを正當に理解することなく、全く誤れる觀念に支配せられ、自らの演説の内容に相應せざるゼスチユアを試み、それが爲めに切角の演説も滅茶苦茶になるのである。是等はすべて演説家が不聰明の爲めにゼスチユアを眞に理解しないからである。吾々の手、吾々の足はすべて吾々の思想及感情とは何等の關係なしに動作するのではなくて、其處に切爾なる關係のあることを看取せねばならぬ。即ち吾々が一たび演壇に立ちて演説を試みる際になすゼスチユアは、全く吾々の

口舌と共に、吾々の思想及感情を談るものであつて決して吾々の口舌が表現する吾々の思想及感情とは何等の關係もなく、全く獨斷的に、無意味的になすのではない。故に、演説家は、此のゼスチユアと演説の内容とに全く切離すべからざる、有機的關係の存することを認識し、而して此の關係をして一層切爾に、一層有機的にならしむる爲め、如何なる場合に於ても細心の注意を拂ひ、以て自らの演説をば一層效果的ならしむるべく努力する所なくてはならぬ。

これを簡単に言ふならば、吾々が演説を試みつゝある際には、吾々の口舌は吾々の思想及感情を如實に談ると共に、吾々の手も、吾々の足も、吾々の胸部も、更に吾々の眼も、其他吾々の有するあらゆる肉體機關は、一瞬間も休止することなく、吾々の思想及感情を聴衆に談つてゐるのである。而して吾々の有するあらゆる肉體的機關は悉く以上の如く思想及

感情を表現すべき可能性を有するにも拘らず、或るもの限り、即ち偉大なる雄辯家に限り、此の可能性を自由に、自己の意志のまゝに實現して、他の演説家が少しもこれを實現してゐないのは、全く平素充分なる練習の缺乏せる結果に外ならぬ。

ゼスチュアを試み自己の演説を一層効果的ならしめんとするには、自己のゼスチュアを最も精力的に、最も感動的に試み、そしてそのゼスチュアが口舌と共に自己の思想及感情を最も的確に表現するやうに努めねばならぬ。而して茲に少く注意せねばならぬことは、ゼスチュアを試みる際には、自己の動作を如何にも態々らしく、殊更らしくするよりは、寧ろゼスチュアそのものを最も的確なる、最も鮮明なる、最も漸進たる概念に依りて動作せねばならぬといふことである。即ち演説家が演説をする際に、それ程の気分にも達してゐないにも拘らず、如何にも感動的

な、如何にも熱情的なゼスチュアを試みるに於ては、そのゼスチュアは自己の演説の内容とは少しも一致した気分を生むことゝはならず、演説は演説、ゼスチュアはゼスチュアと別々になつては聴くもの、観るものをして如何にも滑稽に思はれるからである、斯く演説の内容と、ゼスチュアとの間に蔽ふべからざる矛盾の存するに於ては、演説家はゼスチュアをば如何なる目的の爲めに適用するものであるかを疑はしむるものとなるのは蓋し當然のことゝ言はねばならぬ。其故、斯くの如く殊更らしく、態々らしくゼスチュアを適用するよりは、ゼスチュアそのもの、概念をば明かに理解してゐ、そして随時に最も適當と思はるゝ際に、最も巧妙に適用することを忘れてはならぬ。而して此の練習をなすには、先づ室内に於て比較的大きな鏡の前に於てなすことが最も適當である。鏡は最も正直に吾々の姿を映寫する。即ち吾々は鏡の前に於ては少しも

欺くことは出来ない。實際に於ては笑つてゐる顔を、泣いてゐる顔に映寫しようと思つてもそれは全く徒勞である。笑ひ顔は如何に努力しても尙ほ笑ひ顔になつて鏡に映寫するが故に、若し吾々が自らの喜怒哀樂の顔面表情を鏡に映寫せんとするならば鏡はこれを最も正直に映寫する。俳優は自己の顔面表情を練習する際には多くの場合鏡の前に於てする。彼等は如何にして泣き、如何にして笑ふべきかを鏡の前に於て絶えず練習する。此の練習方法は、演説家に於ても決して忘れてはならぬ方法の一つであつて、顔面表情は勿論、手振、足振、さては全身の動作の種々なる變化等、一として此の方法に依つて練習し得られないものはない。而して此の鏡の前の練習に於ても、普通の談話聲位の程度の高さの聲を出して演説をなしつゝゼスチュアの練習を試みるのが最も効果時である。即ち斯くするならば、自己の試みつゝあるゼスチュアが果して自己の演

説の内容と一致してゐるか否かを容易に觀察し得るからである。そして或る演説を試みる際には、或るゼスチュアが最も適當であり、又た他の或る演説と、他の或るゼスチュアとは最も一致して効果を齎らすものであるといふことを極めて科學的に區別し得られ、而してその經驗を實際の演説の際に、適用し得らるゝ程度まで練習して置かなければならぬ。以上述べたる所に依つてゼスチュアの何たるものかを知ることが出来、且つゼスチュア練習の最も簡易なる方法をも知ることが出来たが、更に第三段階に於て吾々は的確なる、最も根本的な方法を指示するであらう。

ゼスチュアの練習法 第三段階

演説家が、行爲を通じて自己の思想及感情を眞に表現しつゝあることを感ずるやうな段階に達すると、誰しも更に歩を進めて自己のゼスチュ

アを幾分か機械的に改善しようとするやうな冒険を試みるものである。最初に、先づ、手のゼスチュアを試みる際に、手は多くの場合殆んど無意識的に、機械的に動くもの故、演壇に立ちても手は必ずしも意識的に、且つ演説の内容とは一致せざる動作をなさなくともいふことを思ふものである。殊に手が両側に垂れてゐる際は、内的衝動とは何等の關係もなく、其等とは全く獨立して存在してゐるが如くに思はれるが、然し乍ら吾々の手は決して斯くの如く、吾々の意志とは殆んど關係なく、全く機械的に動作するものではない。吾々の微かなる内的衝動と雖も、手以外のあらゆる方面に何等かの影響を及ぼすと同時に、手にも深甚なる影響を及ぼすものである。故に吾々の手が両側にだらりと力なく垂れてゐる時は、全く手を動作せしむべき何等の衝動も起らない時であつて、決して手そのものが内部に起りつゝある衝動を感じないのではない。故

に、両側にだらりと力なげに垂れてゐる手であつても、一旦手を動作せしむべき何等かの衝動を感じる時は、直ちに手は動作を開始するものである。而してゼスチュアが終ると、手は次ぎに表現せらるべき思想に對し多大の注意を拂ひつゝ、暫らくゼスチュアを中止し、そして中止の終りに於て次ぎの觀念が手に何等かの命令を發するまでは中止の状態を繼續するものである。これは一般に思想が確實であり、若しくは表現的である場合には眞理であるが、然し吾々が若しも吾々の觀念に對して注意を拂ふことを欲せざる場合、例へばその觀念を重大ならざるものとして打ち捨るやうな場合に於ても、手は大抵中止するものではない。而して如何なる場合に於ても、ゼスチュアが完了せられた際には、手は垂れ下るものであるか、若しくは何等特殊なる注意なくとも次ぎのゼスチュアに對して準備しゐるものである。

完了せるゼスチユアから逃れる方法は、それを全く忘れることである。而してそれを忘れる方法は、次ぎのゼスチユアを思ふことである。斯くして演説をしながらも次ぎの演説の内容に適應してゼスチユアを變化するといふことは、多くの場合初歩者に聴衆の他の部分を顧みさせる爲めに非常な助けとなるものである。即ち演説家は、或る一つのゼスチユアから他のゼスチユアに移る際に、気分も變化し、其の調子に聴衆の他の方面に向つて眼を轉ずることゝなるものである。而して演説家が演説をする際には、絶えず聴衆の各方面に眼を働かしてゐなければならぬものであつて、決して聴衆の一部分のみに眼を置いてはならないとは屢々説いた所である。ゼスチユアの變化は必ず眼の置き所を變化させるものである。即ち演説家が左の手を揚げてゼスチユアをなすならば、その揚られたる左手に依て左方は遮ぎられる故、従つて演説家の眼は右方若しくは

正面に向つて働くものであり、之に反して右の手の揚げらるゝならば眼は左方若しくは正面に向ふことゝなる。斯くしてゼスチユアを變化することに依て、演説家は聴衆の各方面を萬遍なく顧みることが出来る故、其の演説の効果に及ぼす所は眞に多大なるものと言はねばならない。斯くの如き停語の後ち又は次ぎの語に移る際に現はるゝ極めて微かなる瞬間的方向轉換は、其の際に自分の注意を聴衆の方へ拂ふことゝなり、且つ其の際には何等の努力なくしても手は何時の間にか垂れ下るものであるが、然し其の際に垂れ下る手は決して手が充分なる練習を経てゐないが爲めに偏硬して垂れ下るのではない。

初歩者は或る場合に於て以下の如き疑問を起すことがある。即ち前方に二三歩進まねばならぬやうな言句を用ゐる際に於て自然的に起つた内部の衝動に對しては吾々のゼスチユアは如何に響應すべきかといふことで

ある。而かも其の際に於て吾々は斯くの如き内部の衝動には介意せず、演壇の上を歩くであらうかといふに斯くの如きは決して差支ないのであるが、然し乍ら演説の高調に達せる際に演説家が壇上を歩くのを聴衆は一般に喜ばないものである。これは即ち高調せる演説に對して熱心に聴神経を働かしてゐる際に、若し演説家が壇上を歩くと、殆んど聴神経のみを働かしてゐた聴衆は、急に視神経を働かして演説家の動作を見るやうになる故、切角熱心に働いてゐた聴神経は茲に於て殆んど休止の状態に陥り、依つて聴衆は演説を聴くよりは、演説家のゼスチュアを見るやうになり、之が爲めに大いに聴いて貰はねばならぬ演説が餘り熱心に聴かれないこととなる。結局其の効果を少うすることとなる。演壇に立ちて濃厚なる姿勢を保たうとする人の中には、稍ともすれば演説を試みる際に比較的後方部へ立たうとするが、然し乍ら此のやうな位置に

あつては、多くの場合聴衆に深い感銘を與ふるものとはならないものである。之に反して演壇に立ちて自由なる動作を試みようとする人は、聴衆の各方面に自己の顔を向ける際に、自己の足調子よく整頓するもの故、前者の如く決して後方部にのみあることなく、前後或は左右に位置を轉換して常に出來得るだけ聴衆の印象を深刻ならしめようと試みる。又たこれもよくあることであるが、演壇にある際に、一方の足、即ち大抵の場合左の足を右の足の稍、後方に引いて演説をなしつつあるが、斯くの如き足ごりをなすと、言語にも知らず識らず影響して、句と句との間に多少の間隔が生ずる場合が多い。然しこれは一般の聴衆が容易に感知し得るものではないから必ずしも叱むべきことではない。以上の動作は、比較的に重大なるものではなくて初歩者が必ずしも守らねばならないといふものではない。初歩者は餘りに煩瑣なる、餘りに

復雜なる動作を深き練習なくして直ちに、輕卒に試みようとするならば、却て失敗に終るやうな場合が多いから、それよりも寧ろ最初は、靜かに立てるまゝ、自由に辯舌を振ふことを練習し、更に後ち動作に入る事が最も安全である。

然し乍ら加何なる演説家でも、演説の中ばに於てどうしても自己の身體を前方に進めねばならぬやうな衝動に襲はれることが屢ある。例せば思想が特更に積極的であり、且つ直線的であるやうな場合が即ちこれである。而して斯くの如き動作はそれ自身に於て既に表現的ゼスチュアであると言ひ得る。演説家が演説中の自己の問題に對して更に新しき觀察點を見出さんが爲めに、聴衆の左方若しくは真正面に向つて進むことがあるが、斯くの如き動作は、眞に演説家を利することが多い。何となれば此の動作を試みる瞬間に於て、演説家は多少なりとも頭に餘裕を得る

ことが出来、而して其の餘裕をして次ぎに語らねばならぬ文句を考案することになり得るばかりでなく、感情、態度、更に音聲等の休養若しくは改善をなし得るからである。斯くの如き變化は常に演説家自身に利益あるばかりでなく聴衆にも少しの休養を與ふことゝなるが故に、喜ばしきゼスチュアのの一つとして是非心かけてゐなければならぬ。

是等の實驗を試みよ。即ち演壇に立ちて、會場の左方を見ながら右手を左方に延ばし、更に右方に顔を向け直し、全身と共に右方に歸す、再び同一の位置にありて、今度は手のみを右方へ振る。次ぎには前と全く一變した方法を探り、右方を向きながら右手を右方に歸し、やがて全身のみを右方へ向けて、右手は依然として右方へ歸して置く。次ぎに兩手を左方へ歸しながら顔を左方に向け、そして左手のみを全身と共に右方に歸し、右手は依然として原位置を保つやうにする。斯くの如く左右兩

手を自由に様々に動かして、決して兩手を組み合はせて摩するやうなことをしてはならない。而して自己の演説が最も高調へ達したる際に於て、舞台上の最も感動的に思はるゝゼスチュアを試みながら、「諸君！吾々のすべては共に此の問題に向つて突進しなければならぬ」と、最も感動的な口調で全聴衆に向つて大聲叱呼するならば、聴衆は非常なる感動を以て演説家を喝采するであらう。

然し乍ら多少の批難を有する二三の問題が存する。即ち「演説家の手は肩のあたりから振り廻すべきものであるか」「演説家の肘は全く自由であるか」「肩から指先までの何れの關節もゼスチュアの部分であるか」「全身は果して手の動作と共同して調和的動作をなすか」「ゼスチュアを試みる際に、胴部を前方に、後方に、或は左右に動かすに當つて、床を踏みるゝある足のあらゆる關節よりも、頭より足先までのあらゆる細部は

眞に反應してゼスチュアを助けつゝあるか」「胴部のゼスチュアより生ずる他のあらゆる反應は、手の運動を妨げはしないか」「兩手は或は高く、或は低く、あらゆる運動をなすか」「兩手は常に自由にして完全なる運動の出來得るやうに準備されてあるか」「開いた掌を自由に用ゐてゼスチュアをなし得るか」、其他種々なる問題が起るのであるが、演説を學ばんとするものは是等の問題に對して明瞭に、確實に答辯し得る程に、充分なる經驗を集積してゐなければならぬ。本章の最初に於て述べたるゼスチュア練習法は、是等の問題を最も明瞭に、確實に解決するもの故、初歩者は非常なる熱心を以て是等の練習を幾度となく繰り返すことを忘れてはならない。ゼスチュアは要する練習の結果に得らるべきものであつて、如何なる天才雄辯家と雖も、少しの練習もなくして是等ゼスチュアの眞味に觸れ得るものではない。不斷にして熱心なる練習は、最

後に最も喜ばしき報知を齎らすもの故、如何に拙劣なる演説家に於ても、不斷の努力を以て練習を試みるならば、其處には眞に喜ぶべき結果が現はれなくてはならぬ。不熱心、懈惰、粗雑が如何なる方面に於ても、吾々人間の極力排斥せねばならぬと同じやうに此の演説練習に於ても極力排斥せねばならぬ。

以上の外に吾々は更にゼスチュアには果して如何なる種類の存するものかを揚げて以て、初歩者の参考に供するであらう。

ゼスチュアの種類

以上述べたる所は、主としてゼスチュアを大略に分類することを目的としたものである。然し乍らゼスチュアそれ自身が、或る確實なる暗示又は警告に與ふる所の眞なる價值は決して以上の如く簡單なるものではない。演説家は、すべてゼスチュアとは如何なるものであるかを考へる

以前に、既にゼスチュアを自由に試み得るやうになつてゐなければならぬ。何となれば、初歩時代に於てすべての矛盾に苦しむよりは、寧ろ徒らに苦しむことなくして、大膽に自由に、自ら思ふ所に依て敢行すること、其の人にとつて最善であるからである。斯くの如き理由から以上述べたるゼスチュアを直ちに公開の席に於て適用するよりも、先づ最初に於て既に自由なる演説、自由なるゼスチュアをなし得るやうに練習し、準備し若しくは實際の演壇に於て試み、そして演説及ゼスチュアに就て種々考慮し、以て其の結果を公開の壇上に於て實行することとするのが最も安全である。然るに演説に就て未だ幾許も經驗を有することなくして、直ちに是等のゼスチュアを試みるならば、忽ちにして失敗に陥り、爲めに以外の嘲笑を買ふやうな悲しむべき結果を見るに至ることを記憶してゐなければならぬ。

先づ吾々は、第一に位置を示すゼスチユアを注意せねばならない。位置を示すゼスチユアとは、即ち演説家の現実的対象若しくは想像上の対象の何れにも關して位置を示す所のゼスチユアである。而して此の位置を示すゼスチユアは多くの場合暗示に依てせられることが普通である。即ち演説家が、或る何等かの対象、例せば、距離を示すやうな場合に於ては、手を揚げて其の距離を示す、固より何千里、何萬里といふやうなものである場合には、到底それを確實に言ひ表はすことが出来ない故、先づ會場の或る場所、例へば、會場内の左方の壁から右方の壁へと右手を引いて而して會場内の壁と壁との間に何千里、何萬里といふ遠い距離を暗示する。斯くの如くするならば、聴衆は恰も會場内に演説家の説く所の何千里、何萬里といふ遠い距離が現實にあるかの如くに想像することが出来る。斯かる場合には聴衆は、演説家の揚げた

手、若しくは指示したる場所、即ち此の際には、左方の壁と、右方の壁とを殆んど無意識に見るものである。そして彼等は自己の想像を確實ならしむる。即ち彼等は何千里、何萬里といふ距離をば、演説家の言葉から想像し、而して演説家の指示する壁と壁との間に其の距離を明かに想像することが出来る。

山の高さ、澎湃たる波濤、荒漠たる平野、洋々たる河流等を指示するゼスチユアはすべて位置のゼスチユアであると言ふことが出来る。是等のゼスチユアはすべて其等の状態即ち位置を指示するものであつて、其のゼスチユアに依て聴衆は、演説家の対象とする所のものゝ位置、状態を容易に想像することが出来る。

説明的、若しくは想像的ゼスチユアもゼスチユアの一種類として茲に掲ぐる事が出来る。而して此の種類のゼスチユアは吾々が下の如き言

葉を用ひて演説をする際に適用されるゼスチュアである。例へば「雲は
 憊んな怡形であつた。又た此の様に空を流れ、更に斯々の状態で切れ切
 れになり、そして手を延ばしたやうに亂れた」と言つたやうな際には、
 演説家は必ずゼスチュアを用ひて其の状態を説明するものである。而し
 て此の説明的ゼスチュアは多くの場合、説明者が其の説明語に對して幾
 許の制限を與ふる際になさるゝゼスチュアである。其故、此のゼスチュ
 アは或る時には聴衆の想像を強く刺戟することがあるが、然し乍ら明ら
 かに或る制限を有するものと見ねばならない。更に説明的ゼスチュアは
 高尚なる理想とか、若しくは基礎的の原則に關して語る時に適用される
 こともある。

此の説明的ゼスチュアを試みる際に最も注意せねばならぬことは、ゼ
 スチュアをして決して俳優の科の如きものたらしめないやうにせねばな

らぬことである。演説家は固より俳優ではないのであるから、如何なる
 場合に於ても決して俳優の姿態を模倣してはならない。然るに此の説
 明的ゼスチュアは往々にして俳優の舞臺に於て試みる科と混同し易い、故
 に、此のゼスチュアをして曲解したならば遂に笑ふべき過失に陥ること
 のあるを豫期しなければならぬ。而して此の過失から免かれるには自
 己の演説家なりとの信念を常に確固たるものにして演説をなさねばなら
 ない。此の信念なくして演壇に立ちて此の説明的ゼスチュアを誤解して
 試みたならば其の演説家は遂に聴衆の嘲笑の的となるべきことを豫期せ
 ねばならぬ。

以上の外向は暗示的ゼスチュア、證明的ゼスチュア等がある。其等は
 皆な各其の名の示すが如き意味を有するゼスチュアであつて、各演説に
 裨益する所が多い。殊に暗示的ゼスチュアは説明的、證明的ゼスチュア

等よりも一層聴衆を感動せしむることが多い。即ち説明的ゼスチユア、
 證明的ゼスチユア等が聴衆の眼に訴へるよりは暗示的ゼスチユアが直ちに
 聴衆の想像に訴へ、而して演説の内容をば如何にも神秘的ならしむる
 ことが多いからである。證明的ゼスチユアは説明的ゼスチユアに似て、
 或る論理若しくは或る事實を證明せんが爲めに試みる所のゼスチユアで
 あつて、即ち演説家が演説の内容を一層平易ならしむる爲めに或は手、
 或は指頭を用ゐて試みるゝものである。然るに此の證明的ゼスチユア
 の弊として何處となく力なく、平凡に流れ易い。元來證明とか、説明と
 かいふことは何れかと云へば演説家の好くする所であるよりは、寧ろ教
 師、牧師、僧侶等がなす所のものであつて、彼等は演説家と異り、常に
 生徒、信者等すべて特定の聴衆を相手するもの故、彼等の試みるゼスチ
 ュアは極めて平凡である場合が多い。故に教師牧師僧侶等の間に適用せ

られつゝあるゼスチユアを以て直ちに雑多なる聴衆を相手とする一般の
 演説家に適用して其等に等しき効果を得ることは殆んど稀れであると思
 ねばならない。故に、此のゼスチユアを試みる時は、聴衆が極めて温厚
 なる、若しくは低度なる場合に於てなければならぬ。
 以上説明的、證明的ゼスチユアとは殆んど反對にして聴衆を感化せし
 むるに最も偉大なる効果を有するものに強勢的ゼスチユアがある。此の
 ゼスチユアは演説家にとつてあらゆるゼスチユアの中にあつて最も有益
 なるゼスチユアであつて、如何なる演説家も此のゼスチユアを試みると
 するものである。然るに演説に關して誤れる觀念を有する初歩者は往々
 にして如何なる演説も強勢的ゼスチユアを要するものではない、演説は
 單に内容さへ整頓せられ確實にせられ、豊富であるならば、必ず聴衆に
 偉大なる感化を興ふるものであると言つて、如何にも強勢的ゼスチユア

を否定せんとするものがある。斯くの如きは根本に於て全く誤れるものであつて、強勢的ゼスチュアがないといふことは、其の演説には全く、少しも力がないといふことも意味してゐることに氣が注かないのである。即ちゼスチュアは強勢的ゼスチュアに限らずすべて其の本質に於て強勢的のものであるが、然し乍ら此の強勢的ゼスチュアなる術語は即ち「私の言ふ所は眞に確實である」といふ意味を最も力強く主張する際のゼスチュアとして適用されるのである。故に此のゼスチュアは如何なる方面にも、如何なる演説にも適用されるものでなければならぬ。且つゼスチュア本來の意義は始終同一の動作を繰り返したり、若しくは餘りに同一のゼスチュアを続けることを除かんが爲めのものである。何となれば斯くの如く常に同一の動作、若しくは同一のゼスチュアを繰り返へすやうな習慣があると、ゼスチュアのあらゆる効果が直ちに消滅

する恐れがあるからである。觀念が強勢化された際に、強勢されないものがあるべき筈がない。斯くの如き理由から熱心なる演説家は、何れも強勢的ゼスチュアを試みることをなつてゐる。以上ゼスチュアに關して述べて來たが、然し乍らゼスチュアそのものが既に機械的のものでなくて、全く演説家自身の精神の形式化されたものである以上、或る何等かの模型を以て説明しない限りは斯くの如く紙上に於て論議することは極めて困難であると言はねばならない。然し乍ら以上述べ來つた方法に於て熱心に練習し、少しも焦慮することなく、長日月を期して試みるならば自己のゼスチュアは極めて自然的に、效果的に形成せられなくてはならぬ。然るに若しゼスチュアを全く機械的に練習せんと試みるならば、ゼスチュアは眞に見苦しき、馬鹿々々しきものになり、遂に悲しむべき結果に陥らねばならない。又た若しもゼスチュア

アの練習を絶対に怠つたならば、表現の力を非常に制限するか、若しくは極めて拙劣なるものとなるか、又は演説の感化力を減殺するやうな悲しむべき状態に陥らなければならぬ。吾々が常に演説家に向つてゼスチュアの修養を力説する所以のものは全く茲に存すると言はねばならぬ。

第五章 演説上の興味

演説家の目的

以上述べた所は主として演説の技巧的方面即ち吾々の肉體機關の成るものを巧妙に利用して、以て自己の演説を最も効果的ならしむる方法に關してであつた。以上述べたる方法に依つて吾々は吾々の肉體機關を演説に適用することが出来るが、更に吾々が斷じて見逃すことの出来ない、

而かも演説を學ぶものにとつて最も重大な、最も根本的な問題が茲に尙ほ嚴然として存在することを知ることが出来る。而して若し此の最も重大な、最も根本的な問題が演説家の眼を逸してゐるならば其の演説家が如何に音樂的な音聲を、如何に巧妙なるゼスチュアを、如何に感化的な態度を有するとも、其の演説は遂に何等の効果をも齎らさないこととなるのみならず、其の演説家は單に演説學の技巧的方面のみを修得したる片々たる演説家に過ぎないといふ恐るべき批難は期せずして襲ひ來ることを覺悟せねばならぬ。即ち音聲の訓練、ゼスチュアの練習、態度の修養等は、縦合演説に至大の關係を有するものとは云へ、其の本質に於て遂に根本的のものとなるべき筈のものではなくて、何れかと云へば寧ろ手段に過ぎないのである。音聲、ゼスチュア、態度等は如何に優秀なるものであつても、是等が直ちに優秀なる演説であるとは到底言ひ得ないので

ある。即ち演説上の技巧そのものが、演説そのものではない。故に、或る雄辯批評家は是等の技巧は、演説そのものとは餘りに重大の關係を有せざる全くの末技であるに過ぎないと言つて、是等の技巧に囚はれてゐる演説家を輕んじ、寧ろ是等の技巧的方面を超越し、直ちに演説の根本問題に向つて努力する演説家を眞の演説家なりと認許することがある。勿論、斯くの如き批評家の言説を、吾々は無條件的に肯定することは出来ないとしても是れを以て直ちに演説の本義に徹せざる一派の極端なる議論として排斥し得ないばかりでなく却て其處に深甚なる意味の存することを認めて以て、從來の誤れる演説の觀念を根本的に是正する所ななくてはならぬ。

演説の根本問題とは即ち演説の内容そのものゝことである。演説そのものは屢々繰り返して説きたるが如く、決して演劇、舞踏等の如く技巧を

主としたるものではなくて、或る一定の主義若しくは主張を多數の人々に向つて公開し、而してそれに依て多數の人々を指導せんとすることが其の根本目的であるから、従つてそれが爲めには如何なる場合に於ても必ず内容そのもの即ち主義主張が優秀なるものでなくてはならぬ。此の意味よりして吾々は更に演説の根本目的の説明に向つて研究の歩を進めなければならぬ。

聴衆の層確實なる思想及び彼等の要求や理解力等に顧みて、吾々は全體に於て前章まで述べたる原則を再び適用すると共に、尙ほ聴衆を處理するに於て演説の興味と注意とを以て最も重大なるものなることを考へねばならぬ。

本論に於て演説の内容即ち主義主張及び興味注意等を考察する前に於て演説家に最も有益なる演説家の目的に關して微細なる解剖を成し遂げ、

然る後ち演説家は如何なる場合に於ても必ず何等かの目的を有するものなることを暗示せねばならぬ。

如何なる演説に於ても必ず其目的を有し、而して其目的を達成せんが爲めに演説家は前章に述べたるが如き種々なる技巧を試みるのであるから單に技巧的形式にのみ重きを置いて、最も根本的なる演説の目的を忘却するならば、其の演説は必ずや眞に貧しきものとならねばならない。技巧的形式は全然閉却すべきものではないが、然し乍らそれは演説の目的に對しては全然從屬的關係に於て研究されねばならないものである。斯くの如き悲惨なる演説家は、吾々が議會に於ても、會合演説に於ても、將た市井の演説に於ても屢々見る所であるが、彼等は一度び演壇に立ちて感想の泛ぶがまゝ、知識の回想せらるゝがまゝに種々なる實例、種々なる知識等を見せて、旺んに饒舌を振ふが、然し其の根本目的に向つては

少しの思考も觸れることなく聴衆をして彼の演説家は何を説きつゝあるかを疑はしむることがある。斯くの如き演説家は其の最初に於て根本の目的を自己の心理に確定し置くことなく、若しくは漠然とした目的を抱いて遠く壇上に立つが故に、演説の途中に於て雜然たる實例、煩瑣なる知識に囚はれるのである。世に謂ふ所の「脱線演説」とは即ち是れである。其故、如何なる場合に於ても吾々は技巧及形式は目的の爲めの手段に過ぎぬものと思はねばならない。

然し乍ら演説に於ける困難は必ずしも此の餘りに形式に拘泥する所より生ずるものではなくて、却て演説家が自己中心の演説であり、聴衆には餘りに深き注意を拂はない所なら生ずる。故に若し吾々が演説家の演説を聴く際に、其の演説家が自己の面前にある幾多の聴衆の思想及感情に對して餘りに冷淡なるに驚くことすらある。斯くの如き演説家は或は最初

に目的を有するのであるが、然し乍ら其等は全く不明瞭な少しも確定的なものではないのかも知れないが、然し乍ら彼等は全く自己の演説の過程に囚はれ、他の説を少しも聴くことなく、且つ聴衆の種類及條件等に對しては同情ある理解を缺き、更に聴衆を動すべき動機をも少しも理解することなく、斯くして彼等は自己の演説の反響若しくは無反響等をも意識せず、單に自己の辿らんとする道をひとりで辿るに過ぎない。即ち演説にとつては、深遠なる知識を有してゐるか、ゐないかといふことよりも、自己の心理に深く確く演説の目的と、自己の眼前にゐる聴衆とを思考してゐるか、否かと問題なのである。故に、若し演説家が、自己の心理に、或る何等かの結果を求めつゝある或る種類の聴衆の前に立つて語を續けつゝあるといふことを確實に記憶し、而して自己の得たる知識を、演説の材料を適當に選擇し、且つ整頓すべき絶好なる機會に遭逢し、

更に其等をば此の機會に最も適合すべしと思はるゝやうに組織し、やがてそれをば眞率に表現するといふことを希望して演説するならば決して困難の起るべき筈のものではない。

以上の事柄に關しては特に青年演説家に一層深刻なる警告を與へなければならぬ。何となれば彼等は演説に關して多くの經驗を積んでゐないが爲めに、聴衆が果して如何なる種類のものなるかを確めず、若しくは確めたりとするも、種類には少しも顧慮することなく、如何なる六ヶ敷問題にても容易に理解するものと思推し、自己の最も欲する所の事柄に關して演説を試みる傾向があるからである。斯くの如き青年演説家の誤解は、極めて簡單なる過失より生ずるものであつて、而かも此の過失は青年演説家の屢陥り易い所のものである。即ち經驗の少き青年演説家は自分の演説を聴かんが爲めに聴衆が集つたのであると考へ、自分が

聴衆に演説を聴かせんが爲めに演壇に現はれたのであるといふことを考へてゐないからである。抑々此の誤解が即ち演説家を過誤に陥らしむる原因となるから、屢此の過誤に陥ることのある青年演説家は根本的に此の誤解なきやうに努め、先づ細心の注意を拂つて聴衆の種類性質等を豫め識別してゐなければならぬ。これを實際的に説明するならば、聴衆の大部分が教育程度の低き労働者若しくは商人等である場合には、自分が如何に哲學を専門とし、それに就て深遠なる知識を有するとも、決して哲學に關する少しく深遠なる言説は斷じて避けねばならぬ。知識の程度低き労働者若しくは商人等に向つて深遠なる哲學を講じたからとて決して理解せらるべきものではないから、斯かる際には寧ろ平易なる倫理的修養に關して演説するならば直ちに絶大なる効果を見ることが出来る。斯くの如く知識の高きものには高き知識を示し、低きものには通俗な

極めて平易な演説を試みると共に、商人には商人に向くやうな演説を、老人には老人に適するやうな演説を試み、學生には又た學生の趣味に投ずるやうに自己の知識若しくは意見を發表することが演説家にとつて最も肝要である。

演説家の目的は種々あるけれども吾々は其等を以下の數種に統一することが出来る。即ち(一)聴衆に興味を興ふること、(二)聴衆の抱ける或る觀念を一層明確にすること、(三)信仰心を創造すること、(四)聴衆を感化し指導すること等である。而して以上の目的は、其の場合、場合に依て各演説家の最後の即ち根本となるものであつて、必ずしも是等の目的全部が一時に或る演説の目的となるとは限らない。即ち或る演説は聴衆に興味を興ふることを主たる目的となし、他は悉く從屬的なる地位に置くことがあり、又た或る演説は聴衆を指導、これを悪しき意味に言ふならば煽

動を目的とする場合があり、更に演説家に対する聴衆の信仰心を一層深くすることを目的とするものにして、斯く一が主たる目的となれば、他は何れかと云へば附屬的從屬的目的として主たる目的の爲めには寧ろ手段となる場合が多い。然し乍らこれを一層嚴密に觀察するならば、而かも根本目的として何れの場合に於ても缺けてはならぬものは興味と明確であることを知り得る。即ち演説家が如何に聴衆を煽動し、若しくは確實なる信仰を懐かせしめせんと企てたからとて其の演説が少しの興味もなく、又た少しの明確でもないとするれば聴衆は決して煽動され、若しくは確實なる信仰心を懐くに至るものではない。興味と明確とに次いで重要なる位置を占むる目的は信仰である。これなくしては演説の目的は多くの場合決して達し得られるものではない。即ち聴衆が演説家の言説に對して些かにても疑惑を懐いたり、不信の態度を以てしたりしては演説

家が如何に熱心に力説しようとも何等の效果をも奏するものではない。其故、演説家は自己の意見を聴衆に示さんとする以前に於て既に自身は聴衆の信仰の對象になつてゐなければならぬ。此の意味からして演説家は如何なる場合に於ても自己の意見を陳述する以前に早くも聴衆の中に自らに對する信仰心を創造してかゝらねばならぬ。

興味

前述の如く興味と明確とは演説家の主たる目的であるが、更に一層嚴密に觀察するならば明確なることが必ずしも興味あることとは言はれないが、興味あることが既に明確なることであるを知ることが出来る。即ち單に明確であるばかりが興味となるものではなくて、却て明確には乾燥無味の弊に陥り易い危険性を有するが故に、明確必ずしも興味とは言はれない。之に反して興味は如何なる場合に於ても必ず明確を伴つてゐる。

若し明確が伴つてゐないとすれば興味そのものは直ちに破壊せられ、一種不可解の疑惑若しくは不信を伴ふこととなる。

以上の如くに観察し來るならば、興味が遂に演説の至上目的として常に他の種々なる目的の上位に座して其等を陰密の裡に支配しゐることを知り得る。即ち演説の中に現はれたる興味が依て聴衆は智らず識らずの中に感化せられ、指導せられるやうになるが故に、これに依て演説家は他の種々なる目的を充分に達し得るのである。

興味は斯くの如く演説家にとつて重要なものであるが故に、如何なる場合に於ても興味なき乾燥無味にして而かも單純なる演説を敢てしてはならない。又た如何にして自己の演説を興味的ならしむるべきかに關して常に深い注意を拂つてゐなければならぬ。以下に説く所のものは即ちこれに關する研究の一端である。

演説家は落語家でも、講師でもない、又た俳優でもない。彼等が常に低級趣味を一般の人々に提供することを以て自己の職能としてゐるに反し、演説家は一般の人々に或る趣味を提供し、更にその趣味に従つて人々を指導せねばならぬ二重の責任を有するものであるから卑野なる藝人の如く單なる低級趣味の鼓吹を以て自己の本來の使命と心得てはならない。而して彼等の提供する興味は主として吾々人間の情的方面に訴ふる所の低俗なるものであり、其つ多くの場合吾々の理智に向つて強烈に迫撃して來る所の興味ではない。偶吾々の理智に觸れることあるとして、それは彼等が最初に自ら企てたものではなくて、彼等が叙述の過程に於て偶然に現はれたる所のものに他ならぬ。

演説は講談落語等の如き低級趣味の娛樂に於けると同様に興味を主要なる部分となすと言ふのは如何にも不可思議に思はれるが、然し乍ら決

して不可思議ではない。寧ろ最も普通なる事柄であると言ひ得る。即ち吾々は自己の家常茶飯に關すること、若しくは戀愛、理想等に關して友人知己等と共に會話する際には出來得る限りの興味を含ませて對者の感興を唆るやうにするものである。此の際に於ける吾々の努力は全く興味を以て對者に多大の感興を喚起せしめ、而して自己の會話を最も効果あらしむるといふ一點に集注せられてゐるのである。然るに若し吾々が此の努力を拂ふことなくして、平凡なる話し振りをなすならば對者は少しも感興を催すことなく、寧ろ煩瑣なる叙述には一種の倦怠と疲勞とを對者に感せしむるに過ぎない。斯くの如く興味は對者に潑刺たる感じを興へると共に會話そのものを一層徹底的に理解させることに於てより多くの意義を有することとなる。

一方聽衆は、演説家に向つて常に興味を要求してゐる。或る場合に於

ては興味以外に何物をも要求しないことすらもある。故に、演説會場に行くといふことは即ち或る意味に於ける興味を得んが爲めの外何の意味をも有しないことすらある。又た演説家に於ても聽衆に興味を興ふる以外に何等の目的を有しない場合もある。

而して茲に云ふ所の興味とは必ずしも單なる面白味のみではなくて、吾々人間の情意を唆るすべての事柄を指たものであることを注意せねばならぬ。吾々が普通に興味といふ言葉をば單に面白いか、愉快とかいふものにのみ限つて使用してゐるが、然し乍ら興味なる語は決して斯くの如き狭き範圍のものではなくて、却て吾々を不愉快ならしめ、或は吾々をして嚴肅なる感情に支配せしむるものであつてもこれを興味と言ふことが出来るのである。即ち吾々は面白いこと、おかしきこと、喜ばしきことにも興味を感ずると共に、悲しきこと、不愉快なること、面白くない

いことにも尙ほ或る興味を感ずるものである。故に、演説家は如何に興味を以て自己の演説の中心とすべきものであつても、單に面白いこと、愉快なることより來る興味のみを狙つてはならない。あらゆる方面より來る興味を自己の演説の中に包含せしめて以て聴衆の注意を凝集せしむることに努めねばならぬ。

演説家が一度聴衆の面前に立つとすれば實に多くの實際問題に面接せねばならぬ。如何にして聴衆の注意を凝集せしむるべきかなども其の問題の中の一つである。自己の目的が高尙なると否やとに拘らず、又た言辭の華かなる、音聲の快調なると否やとを問はず、其の演説が聴衆に少しも聽かれなるとすれば何等の效果をも齎らさないこととなる。聴衆が熱心に彼の演説より興味を求めつゝあるにも拘らず、何等の興味をも與へられないとすれば、彼等は其の演説には少しもの注意をも拂ふこと

なく、反對に自己の生活や、戀愛や、其他の事務を考へるやうな結果に陥ることとなる。其故、聴衆をして斯くの如き結果に陥らしめないやうにする爲めに、先づ最初に於て聴衆の注意を凝集せしめ、そして一旦凝集せしめたる注意を最後まで支持して行くやうにしなければならぬ。

然らば如何にして聴衆の注意を凝集せしむることが出来るかと云ふに先づ最初に興味的一端を聴衆に示し、以て自己の演説をして如何にも興味深きものであるやうに聴衆に思はせるのが第一である。然し乍ら未だ多くの経験を積まない若い演説家になると、極めて氣乗りのしない演説を試みながらも、自己の演説が如何にも聴衆の興味を喚起してゐるかの如くに看做し、「これならば屹度聴衆が興味を有つに違ひない」と思つてゐるが、然し之に反して聴衆は少しも興味を有つてはゐないやうな場合が多い。これは聴衆の心理状態を直感的に知覺し得るまでの経験を有し

ない青年演説家の缺點として已むを得ないことであるが、然し一面に於てこれは全く青年演説家が自己の主義主張のみを説くに急々して、而かも興味を殆んど對閑に附するといふ彼等の通弊に負ふ所多いと看ねばならない。此の意味に於て青年演説家は決して偉大なる雄辯家として全聽衆を感動せしむるの第一要件を忘却してゐるものと言はねばならない。最高の威嚴を有する演説家とは即ち自己の聽衆をば絶えず或る何等かの興味を以て索引し得る人を言ふのである。

然るに吾々は「如何なるものが果して聽衆に興味を興ふるものであるか」といふ極めて複雑にして困難なる問題に逢着する。即ち此の問題にして適當に正確に解決せられるならば如何なる人と雖も忽ちにして偉大なる雄辯家として聲名を馳することが出来るのみならず世のあらゆる雄辯學書も此の問題の註釋に一切の頁を費し、他は少しも顧みられない、

従つて本書の著者の試みたる音聲の練習、ゼスチユアの練習等は雄辯に何等の効果をも齎らさないこととなり全くの徒勞を敢てせるものとして世の人々の嗤笑を買ふに至らねばならぬ。然るに此の問題たるや極めて複雑且つ困難なる素質を有するもの故、適當にして正確なる解決は所詮得られないとしても、茲に解決の道程に歩を進め得るの便利を有する二三の原則が得られないでもない。此の二三の原則に依て吾々は複雑なる問題に向つて解決の刃を振ふことが出来る。而して此の二三の原則の中にあつて最も明かに吾々の意識に入るものは吾々は必ず何等か價值あることを談らねばならぬといふことである。畢竟するに演説は屢説いた如く或る何等かの目的を抱いて聽衆の面前に立つものであるから、其の目的が既に何等かの價值あるものでなければ遂に何等の興味をも聽衆に齎らすことゝはならないのである。聽衆に於て如何なる演説家に對しても

何等かの問題に關して價值ある意見を要求し、而してそれに依て興味を感じて、以て或は自己の知識を増し、或は精神修養の資となし、反省の材となす、故に、如何に滔々たる雄辯を弄するとも何等の價值も内容をも有しないものであるならば、聴衆はそれに依て自己の知識を増すこともなく、精神修養の材資をも求むることなくして、單に「巧妙なる饒舌」に接したるかの如き感じを得るに過ぎない。演説とは決して「巧妙なる饒舌」の謂ではなく、眞實なる思想及感情の發現を意味するもの故、從つて演説の研究も亦た「巧妙なる饒舌」を對象とするものではない。如何に巧妙を極めたるものであつても、些の眞實、些の熱誠もなく根本に於て既に饒舌である以上、それに少しの價值をも認むることは出来ない。故に、演説の研究者は何等かの價值ある内容を談ずることを忘れて、單に饒舌に長することを目的として研究の歩を進めてはならぬ。

前述せる所の、演説の内容を價值あらしめるといふことは聴衆に興味を興ふる主要なる條件には違ひないが、然しそれは決して興味そのものと看做してはない。價值は興味を誘發せしむるものとして必ず演説の内容に存在せねばならぬものとして吾々は如何なる場合に於ても演説家に強ふる所のものである。尙ほ吾々は茲に價值と等しく興味を誘發せしむべき幾多の資源に關して研究の歩を進めるであらう。

興味の中にあつても最も多くの人々に理解せらるゝ興味は、最も普遍的なるものであらねばならぬ。例へば吾々が一人の人間に關して談ずるに於ける談話は、其の時に於ける其の人の思想及感情が、すべて其の人の生存及事業等に重大なる關係を有するばかりでなく、尙ほ其の人の快樂を始め情緒の中に包含せられたる一切を意味するものであつて決して純粹の理性的批評とは限られるものではない。即ち簡單に言ふならば吾

々は或る一人の人の噂若しくは何等かの談話をなす際には、單に其の人事的方面のみに關することが多い。故に、先づ斯かる際には、吾々は其の人の生活振りと健康状態に關して語り、それより幾多の方面に進行を續けるものであることは何人も知る所である。つまり吾々は人に就いて談話をする際には、決して所謂噂といふ範圍に限られる場合が多い。而して吾々は斯かることに最も多く興味を感じつゝあるといふことは少しも争ふの餘地なき根本的事實であることを如何なる場合にも否定することは出来ぬ。即ち吾々は個人思想感情等に關する理性的批評に多くの興味を感じるよりも、最も卑近なりと思はるゝ方面に最も多くの興味を感じるのである。其故、吾々は偉大なる政治家、軍人、文學者などに關する話を聴く際に於ても、其等の人物の政策、功績、思想等に多大の興味を感じるよりは、寧ろ却て裏面に隠れたる逸話などに對らざる感興

を覺え、それに倣て一層の親しみを感じずるに至るものである。必ずしも歴史上の偉大なる人物に就いてのみならず現存の偉名ある政治家、軍人、文學者等に關しても、等しく政策、功績、作品によりも其等の人物の生ひ立ち、性向、特徴等に深甚なる興味を見出し、一層深刻なるものに於ては、新聞の三面等に現はれたる家庭の内幕等に一層深刻なる親しみを感ずる場合が多い。

人は一般に勢力及び名聲を得る話には強烈な興味を感じるものであるが、然し乍ら或るものの中には、名譽、社會の安寧幸福、國家の健全、正義等に關する事柄に興味を感じるものもあり、更に愛兒の教育等の如き、愛情に深刻の興味を感じるものもないではない。すべて人は自己に或る何等かの快樂を興ふるものに多大の興味を感じる、故に、人は遊戯、音樂、芝居、文學等に耽ることとなる。即ち簡單に言ふならば人はすべ

て興味のあるものならば如何なるものにも興味を感じ、自己の情緒を高調せしむるものには必ず興味を感じるものと見ねばならぬ。

歴史、小説、戯曲、社會科學等を始め、其他幾多の興味は、人類の何れにも行き亘れる極めて廣汎なる興味には違ひないが、然し是等は必ずしも人間の感興を強烈に唆るものとは言はれない。即ち或る人にとつては社會科學には多くの興味を感じるも、小説、戯曲等にはさしたる興味をも覺ゆることなく、又た或る人にとつては小説戯曲等の文藝上の作品に深甚なる興味を發見し得るも、社會科學歴史等には極めて稀薄なる興味を感じることもすらある。是等のものは一般に行き亘れる興味には違ひないが、必ずしも個人個人を強烈に感動せしむるものではなく、其の強弱の差は著しくなることを容易に發見し得る。然るに之に反して常に何人にも強烈なる興味を感じしめ、決して其處に強烈の差を見出し難いも

のがある。それは言ふまでも前述せる所の個人性である。此の個人性には何人も深甚にして且つ強烈なる興味を實感し、人は先づ何よりも先きに其の個人性について談ることを常としてゐる。而して此の個人性とは、これを簡単に言ふならば、人々の性格の相違せることを表現するものであつて、これに依て吾々は甲は甲なり、乙は乙なりと各人に對する差別意識を経験し得るのである。即ち十人十色とは此の個人性の相違せることを言つたものであつて、吾々は常に此の個人性の相違即ち十人十色に多大の興味を實感して常に不可思議と思はるゝ程に強烈の快樂を覺ゆるのである。多くの人間が社會といふ共同生活體を組織して常に幾分の快樂を感じつゝあるのは言ふまでもなく、此の個人性の相違が齎らせる興味に負ふ所が多い。即ち人事には如何なる人も興味を感じずにはゐられないのも皆なこれが爲めである。英國の文豪カーライルが「人間は私にと

つて不変の興味である。これは決して人間が私に興味を興ふる材料を有するからではなくて、人間それ自身が既に興味そのものであるからである」と言ひ、伊太利の戯曲作家テレンスが「私は一個の人間であり、而してあらゆる人事は私にとつて此の上もない興味である」と言つて夫々驚異の感を表現したのは、言ふまでもなく前述の意味を最も適確に表現したものである。

興味を求むる法

興味が殆んど演説の中心であり、且つ聴衆を感動せしむる唯一の手段であるから先づ何人も自己の演説をして興味的ならしめねばならぬのが當然であるのであるが、然し乍ら多くの場合、極めて老練なる演説家を除いては、これを實現してゐないのは何よりの遺憾であると言はねばならぬ。殊に青年演説家に於ては前述せるが如く、自己の識見の博大と、

知識の博大とを誇示するに急にして、而かも聴衆に適應せる興味を提供して以て充分なる感動を興ふることを忘れ、それが爲めに切角の博大なる知識や、高遠なる識見も遂に何等の感興をも聴衆に興ふることなくして屢、彼等に一種の軽い倦怠を催ふさせるのは、眞に傷ましきことである。故に、青年演説家は一面に於て多大の努力を以て、常に識見の高邁と、知識の博大とを期すると共に、一面に於て如何にして自らの演説に聴衆を感動せしめ、愉快を感せしむるに足るべき興味を添ふべきかに關して細心の注意を拂ふことを忘れてはならぬ。

演説は多くの場合種々雑多なる人々を對象としてなさるゝもの故、深遠なる學理、高邁なる識見、遠大なる理想を聴衆に示さんとするに際しても、決して單純に論理の過程を辿つて煩瑣なる説明を試みることなく、寧ろ論理の過程を辿る際の何れの瞬間に於ても、必ず他の方面に於ける

事實、即ち聴衆の最も親しみのある方面の事實にして、而かも常に聴衆に最も興味あるものとして知られたる事實を拉し來つて、而して自己の演説の適當なる部分に挿入して、説明の補助となすことが最も有效である。

如何なる場合に於ても單純に論理の歩を進めてはならない。そして自己の演説を何等かの知識、事實、譬諭、昔話、謎、漢詩、和歌、狂句、川柳等すべて一般の人々が常に幾許かの愉快を感じつゝあるものと巧みに結びつけることが最も肝要である。又た或る場合に於ては古今東西の偉人英雄若しくは女丈夫の言行等を引證して説明するのも必ず相應の感興を催させる手段となる。

單純なる形式を以て論理を辿つて行くと聴衆に少しの興味をも與ふる事なく、却て倦怠と疲勞を感じせしめ更に不愉快なる感情を起さしめ爲め

に演説の効果を減少せしむる者であると言ふ事は屢々説いた事であるが故に、演説家は聴衆の其の弊を除く手段として先づ聴衆が如何なる階級の人々であるかを充分に理解して居なければならぬ。而して其の階級に相當せる話材を拉し來りて演説の性質と關係ある様に巧に結び付け、而して彼等に尤も親みある説明を試みねばならぬ。例へば農夫が聴衆の大部分を占むる時には自己の演説が政治、文學、若しくは歐洲戦争等に關する事であつても必ず農業若しくは農夫に何等かの關係ある材料を提呈して而して彼等が尤も平易に理解し得る方法を探るならば彼等は演説の内容に對して必然的に興味を感じる事となるのである。然るに此の場合に若し政治、文學、若しくは歐洲戦争等を其の儘論理的に反復説明を試みたからとて其は彼等の生活若しくは經驗と少しの關係をも見出せないが故に、彼等は興味を感ずるとしても決して深甚なるものではあるまい。